京都府名誉友好大使レポート集



２０２６年４月

京都府国際課

目次

※名前またはタイトル部分をクリックすると、該当ページにリンクします。

修 徳健（しゅう とくけん）「2025 年度中国の流行語について」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

（平成５年度任命・青島市出身・青島市在住）

邵 振宇（ショウ シンウ）「東京国立博物館にみる長安の面影」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

（平成１８年任命・陝西省出身・西安市在住）

単 寧（タン ネイ）「感謝の気持ちを忘れず」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

（平成１８年任命・山東省出身・厚木市在住）

K. プラポンサック「不確かな時代を共に歩む」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

（平成１９年任命・タイ・バンコク都出身・アユタヤ県在住）

林 依蓉（リン イヨウ）「茶の湯とオーバーツーリズム」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

（平成２１年度任命・台湾出身・京都市在住）

ザオプトラ アントニウス アンドレ「AI という諸刃の剣」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（平成２６年度任命・インドネシア出身・大阪市在住）

ドゥガール アレクサンドリア メリー

「ハリファックス市のウオーターフロント」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

（平成２６年度任命・カナダ出身・カナダ在住）

ガラス セゲル ハビエラ クリスティナ

「世界の果てへの旅：チリ・パタゴニアを訪れて」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

（平成２８年度任命・チリ出身・京都市在住）

沈 家銘（シン カメイ）「大阪万博における台湾の国際協力像」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

（平成２８年度任命・台湾出身・大阪市在住）

アウドリュース サブナース

「リトアニアと日本の新しい架け橋−チュルリョーニスの芸術」・・・・・・・・・・20

（令和元年度任命・リトアニア出身・東京都在住）

李（リ） 帆（ハン）「新疆紀行」・・・・・・・・・・

方　熠辰（ホウ　イシン）「変種変量生産を支える鋳物輸入と Society5.0 のものづくり」・・・・・・48

（令和７年度任命・上海市出身・京都市在住）

アフメット・ジャン・プルトゥジュ

「トルコ出身者から見た京都-文化の架け橋としての名誉友好大使活動を通して一」・・・ 53

（令和７年度任命・トルコ共和国出身・京都市在住）

キム・ユンギョン

「名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと」・・・・・・・・・・55

（令和７年度任命・韓国出身・京都市在住）

黄　登肯（コウ　ダンカン）「台湾に根づく日本チェーン店」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

（令和７年度任命・台湾出身・京都在住）

張　歆婕（チョウ　キンショウ）

「双都物語：京都の静と西安の動が交差する、もうひとつの千年の都へ」・・・59

（令和７年度任命・西安市出身・京都市在住）

張　瑜淳（チョウ　ユ ジュン）「出会いと挑戦の一年　京都府名誉大使として学んだこと」・・・・・・ 61

（令和７年度任命・上海市出身・京都市在住）

林　潔杏（リン　ケツキョウ）「私のふるさと一広西について」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

（令和７年度任命・広西チワン族自治区出身・大阪市在住）

ン・シャンイー「シンガポールと京都の文化多様性」・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

（令和７年度任命・シンガポール出身・京都市在住）

※居住地は令和８年３月現在

＜2025 年度中国の流行語について＞

氏　　名：修徳健（しゅう　とくけん）
任 命 年 度：平成 5 年度任命
出　身　地：中国青島市
在　住　地：青島（市）在住



2025 年度中国の流行語について

2025 年の中国では、技術革新や社会の変化、人々のリアルな気持ちを映した様々な流行語が生まれた。以下に、特に注目されるいくつかのものをその背景とともに紹介する。（中国語での読み方は、原音とは少しズレがあるが、小学館『日中事典』（1993）巻末に掲げられた中国語ピンインーカタカナ対照表を参考にして示した。漢字は日本で通用する常用漢字を用いた。）

1．深度求索（ｼｪﾇ　ﾄﾞｳ　ﾁｨｳ　ｽｳ　DeepSeek の意訳語。）
これは世界的にも大きな話題となり、中国企業が開発した大規模言語モデル（AI）のことを指す。低コストで高性能な「中国ソリューション」として注目され、中国の技術革新と実用化への志向を示している。AI が研究段階から社会に浸透し、生活や産業を変えつつある現状が反映されている。

2．情緒価値（ﾁﾝ　ｼｭｨ　ｼﾞｨｱ　ｼﾞ）
元はマーケティング用語。人や物・サービスが、相手に提供できる「感情的な豊かさや安心感」を指す。人間関係や職場で重要な「通貨」となっている。これによって物質的な豊かさを超えた、精神的な充足への欲求を表している。効率や利益だけでなく、情緒的なつながりや心の安らぎが個人の選択において重要な価値基準となっていると反映されている。

3．活人感（ﾌｫ　ﾙｴﾇ　ガヌ）
ソーシャルメディア上で、過度に包装された完璧な人物設定ではなく、ありのままの、生きている人間らしいリアルさや不器用さを評価する言葉として若い世代で使われている。AI・デジタル時代における「本物」への願い、高度に最適化された虚像に対し、等身大の自分や温かい人間らしさを大切にしたいという気持ちが込められている。

4．韌性（ﾙｴﾇ　シン　簡体字で“韧性”と書く）
外力に柔軟に対応し、元の状態に回復する力のことを「韌性」という。経済・

産業・個人の精神など、あらゆるレベルで「しなやかで強い回復力」が重視され、不確実性の高い時代における社会と個人の在り方を表している。外部からの挑戦に直面しても、持続可能な発展を目指す中国社会の姿を反映する流行語として注目された。

5. 敬自己一杯（ジン　ズ　ジィ　イ　ベイ）

仕事や人生の節目に、自分の努力や平凡な日常を労い、自分自身に乾杯する行為を指す。SNS で広がり、一種のセルフケアの儀式となっている。内なる自分との和解と自己肯定を含意するものとして若者の間で使われている。ストレス社会の中で自分を認め、前向きに生きようとする姿が反映されている。

6. 賽博対賬（サイ　バオ　ドォ　ジヤン）

賽博は「サイバー」の漢字音訳語で、「サイバーを通じて帳尻を合わせる」の意。米国など海外のネットユーザーが中国の SNS に流入し、互いの生活の「データ」（実情）を交換して、固定観念や誤解を解消する文化交流の現象を指す。ボーダーレスな草の根レベルでの国際理解と公式メディア以外のルートで、生の声を通じた相互理解が進む新しい形の国際交流を反映したものとして流行っていた。

これらの流行語は、単なる一時的なブームではなく、中国社会が今、何を考え、どこに向かおうとしているかを映し出すものとして話題を呼んでいる。

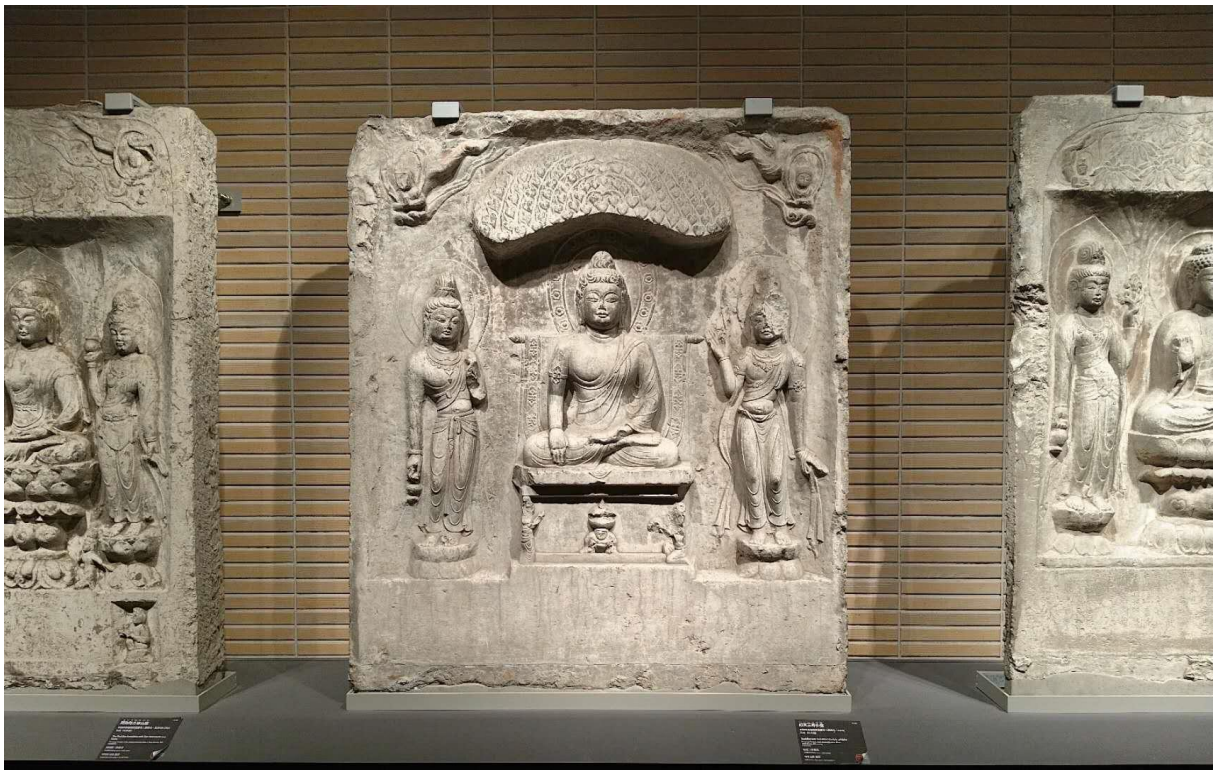
＜東京国立博物館にみる長安の面影＞



氏　　名：邵 振宇（ショウ　シンウ）
任命年度：平成 18 年度任命
出　身　地：中国 陝西省
在　住　地：中国 陝西省 西安市在住

東京国立博物館の東洋館には、一組の唐代石仏像が収蔵されている。これらは繊細な彫刻技法と荘厳な風格を兼ね備え、盛唐における仏教美術の最高到達点を示す貴重な遺物である。現在、同館東洋館 1 階の展示エリアの約 3 分の 1 を占める、極めて重要な展示品となっている。

これらの石仏像は、かつて唐の都・長安にあった光宅寺（こうたくじ）の七宝台（しっぽうだい）を飾っていた石彫浮き彫りである。七宝台は武則天長安 3 年から 4 年（703～704 年）にかけて建立された。その地はもともと武則天の葡萄園であったが、武則天儀鳳 2 年（677 年）、石鉢に納められた一万粒の仏舎利が発見された。これを受け、武則天は舎利を全国各地の寺院に分かち安置させるとともに、この葡萄園を光宅寺へと改め、仏舎利を祀るための七宝台を築いたのである。専門家の推定によれば、七宝台は多角形の仏壇形式の建物で、その周囲に精巧な石彫仏龕が嵌め込まれていたと考えられている。



東京国立博物館東洋館にある唐代光宅寺七宝台の石彫仏像

702 年、日本の文武天皇が派遣した粟田真人ら使節団が、長安で武則天に謁見した。使節団は「日の出る所に近いので日本と改めた」と説明。武則天はこの新しい国号を認め、粟田真人の教養の高さを絶賛して「司膳員外郎」という官職を授け、手厚くもてなした。武則天は仏教を国家統治の基盤に置き、全国に「大雲経寺」という官立寺院を建立した。この「一国一寺」のシステムは、後に日本の聖武天皇が発願した「国分寺・国分尼寺」制度の直接的なモデルになったと言われている。

唐代の長安は、現在の西安にあたる。明代に入り光宅寺が荒廃すると、七宝台に残されていた仏龕は西安城南門内の宝慶寺へと移された。現在も宝慶寺の跡地には宝慶寺塔が残っており、塔の外壁には今なお 6 基の石彫が嵌め込まれている。



西安南門と宝慶寺塔

七宝台の石彫は、宝慶寺塔に残るもののほか、日本やアメリカの複数の博物館に分散して収蔵されている。東京国立博物館が所蔵する石仏像は、十一面観音龕、倚坐（いざ）如来龕、触地印（そくちいん）如来龕、無畏印（むいいん）如来龕の 4 種に分類されるが、中でも 2 体の十一面観音立像が最も名高い。

例えば、長安 3 年に製作された「徳感造十一面観音龕」は、一つの石灰岩から彫り出された全高 109 センチメートルに及ぶ名品である。観音は蓮華座の上に直立し、頭頂にはそれぞれ表情の異なる十一の面を戴く。主尊の顔立ちはふっくらと円満で、細い目元には慈悲深さと厳かさが満ちている。衣の裾は薄く風になびくように軽やかで、衣紋（襞）は流れるような曲線を描き、肉体の優美な輪郭を際立たせている。胸飾や腕輪などの装飾も精緻を極め、細部に至るまで当時の職人の技巧が凝らされている。その様式はインド・グプタ朝美術の影響を色濃く反映しており、写実的な肉体表現と躍動感あふれる装飾が見事に融合している。盛唐の仏像特有の、豊満で自由、かつ優雅な風格を完璧に体現したその姿は、「東洋のヴィーナス」とも称えられる。

仏像に刻まれた紀年銘や功徳銘は、製作年代や歴史的背景を裏付けるだけでなく、唐代の仏教信仰や皇室による造像制度、さらには東西文化交流の実態を解明するための極めて貴重な一次史料となっている。

＜感謝の気持ちを忘れず＞



氏名：単　寧　（タン　ネイ）
任命年度：平成１８年
出身地：中国山東省
在住地：厚木市在住

今年のお正月休みが終わった、ある日のお昼休みのことです。以前、大阪で大変お世話になった平野さんから、九州よりお電話をいただきました。「声を聞きたくなったから」とおっしゃる平野さんの声を電話越しに聞き、私は心から幸せな気持ちになりました。

学生の頃、お正月になると、いつも大阪にある平野さんのお宅にお邪魔していました。当時、平野さんは私の母よりも年上でしたが、一緒に過ごしていると年の差を感じることはほとんどありませんでした。とても優しく、いつも穏やかな笑顔で迎えてくださり、毎回おいしい料理を作ってくださいました。寂しさを感じることも多かった留学生活の中で、私は平野さんの笑顔と温かい手料理に、何度も救われていました。

私が社会人になった頃、平野さんは故郷である九州へ戻られました。離れて暮らすようになり、なかなかお会いすることはできませんでしたが、「また会いたい」という気持ちはずっと変わりませんでした。人生の中で最も幸せなことの一つは、「再会」だと思います。大切な人と再び会えることを思うだけで、心が弾みます。平野さんと再会するため、昨年１月に家族三人で佐世保まで行きました。「また会えてよかったねえ」と、とても喜んでくださった平野さんの姿が、今も心に残っています。私も同じ気持ちでした。十数年ぶりの再会でしたが、気持ちの上ではずっとつながっていたからか、まったく違和感はありませんでした。平野さんは、「近くに住んでいたら、ご飯を作りに行ってあげるよ」と言ってくださいました。その言葉は、今でもはっきりと覚えています。平野さんは、私のことを本当に自分の子どものように思ってくださっていたのだと思います。感謝しても、感謝しきれないほどです。

振り返ってみると、日本での生活の中で、本当に多くの方々に支えられてきました。
皆さんとても優しく、いつも私を支えてくださいました。その感謝の気持ちを忘れず、いつか少しでも恩返しができるよう、これからも歩んでいきたいと思います。

＜不確かな時代を共に歩む＞

氏　　名：K.プラポンサック
任 命 年 度：平成 19 年度任命
出　身　地：タイ・バンコク都
在　住　地：タイ・アユタヤ県在住

こんにちは！皆さんにお会いできてうれしいです。今日は、先行きの見えないこの時期に、皆さんの助けになるかもしれない取り組みについて共有したいと思います。

実は私がこうした活動を始めたのは、数年前に遡ります。当時、私は幸運にも京都府名誉友好大使として、京都に滞在する機会に恵まれました。京都は、壮麗な寺社仏閣や美しい庭園で知られていますが、私がそこで最も深く感銘を受けたのは、人々の生活や文化の中に静かに息づく「心のあり方」でした。

その京都での深い経験があったからこそ、昨年、私はボストンのマサチューセッツ工科大学（MIT）で「マインドフルネス瞑想」、つまり「評価や判断をせず、ただ今この瞬間に意識を向ける」という実践を紹介する機会を得ました。

ご存知の通り、私たちは目まぐるしい変化の真っ只中に生きています。学業におけるプレッシャー、将来への不安、そして世界中で起こる様々な出来事。情報の洪水の中で、私たちの心は常に何かに追われ、疲弊しがちです。多くの学生が、高い目標を掲げながらも、内心では燃え尽きそうな感覚や孤独感を抱えているのではないでしょうか。私も廊下ですれ違う皆さんの中に、かつての自分と同じような葛藤を見る時があります。

マインドフルネス瞑想は「頭を空っぽにする」ことや「問題を消し去る」ことではありません。むしろ、自分の思考や感情、身体の感覚に、親しい友人のように優しく気づいてあげる練習です。嵐の海の上で波に翻弄されるのではなく、海の深い場所にある静けさに降りていくような感覚です。瞑想を通じて、私たちは刺激に対して反射的に「反応」するのではなく、一度立ち止まって、自分にとって最善の「対応」を選ぶための心のスペースを育てることができます。最後に、古代ローマの哲学者の言葉を分かち合いたいと思います。

「我々は現実よりも想像においてより多く苦しむ」
－ セネカ（紀元前 1 年頃～紀元後 65 年）



- **What : Mindfulness for Busy People**
- **Where : MIT Innovation Office**
- **When : November 1, 2024 - May 31, 2025**
- **Who : MIT Staff Members and students**

A weekly break for MIT staff to cultivate calm and focus. Practice simple mindfulness techniques in a welcoming environment.

** Supported by the MIT School of Engineering.





＜茶の湯とオーバーツーリズム＞



氏　　名：林　依蓉（リン　イヨウ）
任 命 年 度：平成 21 年度任命
出　身　地：台湾　台北市
在　住　地：京都市在住

近年の京都は、世界中の人々を惹きつける国際観光都市として、ますます存在感を高めています。町を歩けば、さまざまな言語が聞こえ、四季折々の風景とともに、多様な文化が行き交う光景が日常となりました。その一方で、観光客の急増は、街に少しずつ負担をかけ始めています。路地に残るゴミ、立ち入りが制限された場所への無遠慮な侵入、地域の人々との小さな摩擦。いわゆる「オーバーツーリズム」という言葉が、京都においても現実味を帯びて語られるようになりました。私たちは今、「訪れること」と「守ること」をどう両立させるかを問われているのかもしれません。

そんな中で、私は茶の湯という文化の営みに、ひとつの静かなヒントを感じています。茶道は、派手な説明や強い規制で人を縛るのではなく、所作や空間を通して、自然に心と行動を整えていく文化です。



京焼工房見学、茶碗作り体験

工房を訪れたときには、写真を撮る前に必ず職人に一声をかけ、空間や仕事への敬意を忘れませんでした。食事の場では、茶懐石の流れや器の扱いに興味深そうに耳を傾け、講師の所作をそっと真似ながら、配膳や器の受け渡しを静かに行っていました。食後、箸をきちんと揃えて置くようになった参加者もいて、

そのささやかな動きが、同じ卓を囲む人々の間に、心地よいリズムを生み出していたのが印象に残っています。

露地や庭園を歩くときも同じでした。石畳の上を一列で進み、ふと立ち止まって景色に目を向け、苔を踏まないよう足元に気を配る。その姿は、場所を「消費する対象」としてではなく、「ともに大切にする場」として受け止めているように見えました。

これらの振る舞いは、単なるマナーの習得ではありません。茶の湯のお稽古を通して、空間や他者へのまなざしが少しずつ変わり、結果として行動が自然に変化していきます。観光の未来を考えるとき、こうした静かな行動変容こそが、持続可能な京都への一歩になるのではないでしょうか。茶の湯の文化の中で育まれる感覚が、やがて街全体へと滲み出していくことを、私は密かに願っています。



茶懐石のいただき方体験（写真：仁和寺提供）

＜AI という諸刃の剣＞



氏　　名：ANTONIUS ANDRE ZAOPUTRA
（アントニウス・アンドレ・ザオプトラ）
任 命 年 度：平成 26 年度任命
出　身　地：インドネシア、ジャカルタ
在　住　地：大阪市在住

皆さん、今や当たり前の話題で恐縮ですが、AI は使いこなしていますか？

私が同志社大学を卒業して、早いもので 8 年が経ちました。化学を専攻していた当時は、京田辺キャンパスの図書館にこもり、分厚い洋書を黙々と書き写したり、海外の論文を読み漁ったりする研究の日々を過ごしました。

当時は苦労の連続でした。日本語で論文を書こうとすれば、誤字脱字、言葉選び、文法などを先輩や友人に厳しく指摘されました。プレゼン資料を作っても、データの貼り付け方が下手だったりスライドが分かりにくかったり、とにかく何度も修正を重ねてようやく大学院を修了したのです。母国語ではない言語で、日本錯体化学会で学生賞をいただけたことは、今でも自分を褒めてあげたい大切な思い出です。

そんな中、昨年 SNS である動画を見かけました。UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の卒業式で、ある学生が「ChatGPT のおかげで論文を書き上げた」と、カメラに向かって誇らしげにパソコンの画面を見せて自慢していたのです。皮肉なことに、この学生の名前は私と同じ Andre さんです。

すでに仕事で AI を活用していた私でも、これには衝撃を受けました。「すごい時代になった。昔、私があれほど苦労したものが、今やプロンプト一つで、秒単位で作れてしまうのか」と、羨ましく思う気持ちもありました。

しかし、便利すぎる反面、危うさも感じています。「早く答えを知りたい」「面倒なことは考えたくない」と安易に AI を頼りすぎることで、社会人も学生も、思考力や判断能力が著しく衰えているのではないか、と肌で実感するからです。後輩の指導をしていても、自分で考えようとせず、すぐに正解だけを求めてくる姿勢に、時として腹立たしさを感じることがあります。しかし、私自身もかつてより「考えること」を面倒に感じ始めていることに気づき、ハッとさせられました。

もちろん「AI を使うな」と言いたいわけではありません。 現代の仕事において、AI なしでは業務が進まないのも事実です。あらゆる面倒なタスクを正確に処理し、調べ物や資料作成の時間を劇的に短縮してくれる AI は、勉強の工夫も教えてくれる心強い味方です。

しかし、AI はまさに「**諸刃の剣（もろはのつるぎ）**」です。 使い方次第で、私たちにとって「**最強の友**」にもなれば、思考を奪う「**最恐の敵**」にもなり得ます。

ぜひ、学生の皆さんにお伝えしたい。 せっかく日本へ、そして学生の街・京都へ学びに来たのですから、すべてを AI に丸投げするのではなく、自分の「地頭」で考える癖を大切にしてください。

効率化は AI に任せ、その分、浮いた時間で「自分にしかできない思考」を深める。そんな賢い付き合い方を目指してほしいと思います。

※この文章は、最後に Gemini がチェックしました。
……あれ、私も AI に頼りすぎでしょうか？

＜ハリファックス市のウォーターフロント＞

氏　　名：ドゥガール・アレクサンドリア
任 命 年 度：平成 26 年度任命
出　身　地：カナダ
在　住　地：カナダ在住







（自分の写真です）

このレポートでは私の好きな場所を紹介させていただきたいと思います。
ハリファックス市のウォーターフロント（ハリファックス市の人々は the waterfront と言う）は綺麗な賑やかな場所です。美しい大西洋の側に街の雰囲気を感じられます。
特に夏は賑やかなところですが、寒くてもクリスマスの時期のイベントが楽しくて、イルミネーションも綺麗です。

そして、たくさん楽しむことができるところです。例えば運動したい人々、特に散歩やランニングをする方が多いです。それに、ミュージアム、ホテル、大きい船や小さい船、アートや近くのアートギャラリー、いろいろなレストランやカフェ、ボートのシティ・クルーズやサイクリングツアー、子供達の遊び場、お店などもたくさんありますのでここはハリファックス市で大人気の場所です。

シーフード、スイーツ、アイスクリーム、お土産など、いろいろなものはここにあります。ノヴァ・スコシア州の農産物（野菜など）が売っているファーマーズマーケットもあります。

そしてその近くに冬以外はハリファック市にはたくさんのクルーズ船も港に着きます。天気が良いので特に夏は観光客が多い都市です！それに、ウォーターフロントからGeorges Islandという島が見えます。灯台や他の歴史的なビルなどがあります。そして、見に行きたい方はボートに乗ってツアーに参加できます！

ウォーターフロントは動物が好きな方も楽しめると思います。カモメ、カモ、鵜などがたくさんいます。それに可愛い犬を散歩させる方も多いです。それではみなさん、どの季節でも楽しいのでいつかハリファックス市の港やウォーターフロントを経験しませんか？

＜世界の果てへの旅：チリ・パタゴニアを訪れて＞



氏　　名：ガラス　セゲル　ハビエラ　クリスティナ
任命年度：平成 28 年度任命
出　身　地：チリ
在　住　地：京都市

パタゴニアという言葉を聞いたことがありますか？おそらく最初に思い浮かぶのは衣料ブランドかもしれません。しかし、パタゴニアとは、南アメリカ最南端に広がる広大な地域の名前で、アルゼンチンとチリにまたがっています。私はアルゼンチン側のパタゴニアには行ったことがありませんが、チリ側にはこれまでに 3 回訪れたことがあります。少しご紹介させてください。

私が訪れた地域は、プンタ・アレナスという都市の近くにあります。この都市は、私の出身地である首都サンティアゴから 2,973 キロメートル離れています。行き方は飛行機のほか、車やバスでも行くことができます。もし車やバスを選ぶ場合､所要時間はおよそ 2～3 日で､チリ南部には多くの島々があるため、旅の一部はアルゼンチンを経由することもあります。



三つの塔の眺め（本人撮影）

私はこれまで飛行機でのみ訪れています。フライトは比較的短く、到着するとすぐに、冬でも夏でも強い風を感じるでしょう。プンタ・アレナスは 1848 年に創設され、マゼラン海峡のすぐそばという重要な立地により、その後大きく発展してきました。

プンタ・アレナスからは、より小さな町であるプエルト・ナタレスへ行くことができ、そこからトーレス・デル・パイネ国立公園行きのバスに乗ることができます。この公園はユネスコの生物圏保存地域に指定され､「世界第八の自然の驚異」とも称される場所で、約 22 万 5 千ヘクタール（55 万エーカー）にわたる手つかずの雄大な自然が広がっています。

パイネの角の写真（本人撮影）



最後に訪れたのは 2022 年 7 月でした。3 回目の訪問として、夫と一緒にハイキングをするために行きました。これまでに多くの場所を見てきましたが、ここは間違いなく、私がこれまで見た中で最も息をのむほど美しい場所の一つです。夫もまた、野生動物の豊かさにとても感動していました。旅の間には、グアナコ（ラクダ科の動物）、アルマジロ、そしてニャンドゥ（ダチョウに似たレアの一種）を見ることができました。ピューマやさまざまな種類の鳥が見られることもあるそうです。



ハイキンググループの写真（本人撮影）

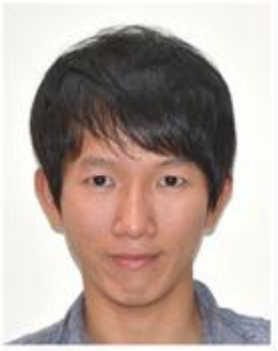
私たちはとても早い時間に出発しました。冬（チリでは 7 月が冬です）だったため、ツアーガイドと一緒に行く必要がありました。朝 5 時 30 分に迎えに来てもらい、公園までは約 90 分かかりました。道中には雪や氷があったため、アイゼンを着用する必要がありました。私はそれほど経験豊富なハイカーではないので、このハイキングにはとても不安を感じていました。しかし、歩き始めると次第に自信がつき、目の前に広がる景色の美しさに心を奪われました。

ベースの展望地点に到着するまでに約 4 時間かかりました。ハイキングの大部分は中程度の難易度でしたが、最後の区間は非常に大変でした。地面には雪が積もり、風は非常に強く（風に体が押されるほどでした）、道は急で細かったのです。しかし、頂上に到着したときには、曇っていたにもかかわらず、信じられないほど素晴らしい景色が広がっていました。

この体験は心からおすすめできます。ハイキングにあまり興味がない人向けの選択肢もあります。でも、本当に景色はそのすべての苦労に見合う価値があります。

あなたも訪れてみたいですか？もし行くなら、ぜひ夏（11 月～3 月）に行くことをおすすめします。天候がより良く、晴れた日に美しい景色を見られる可能性が高いからです。

＜大阪万博における台湾の国際協力像＞



氏　　名：沈家銘（シン カメイ）
任 命 年 度：平成 28 年度任命
出　身　地：台湾高雄市
在　住　地：大阪市在住

大阪万博における台湾の国際協力像

私が尊敬する国連難民高等弁務官緒方貞子氏は、「自分の国だけの平和はあり得ない。世界につながっているのだから」と述べました。

台湾は長年にわたり、開発協力を通じて国際社会の一員として責任を果たしています。私たちは「人間の安全保障(Human Security)」を重視し、教育・農業・保健・デジタル技術・防災など多岐にわたる分野で協力を進めています。

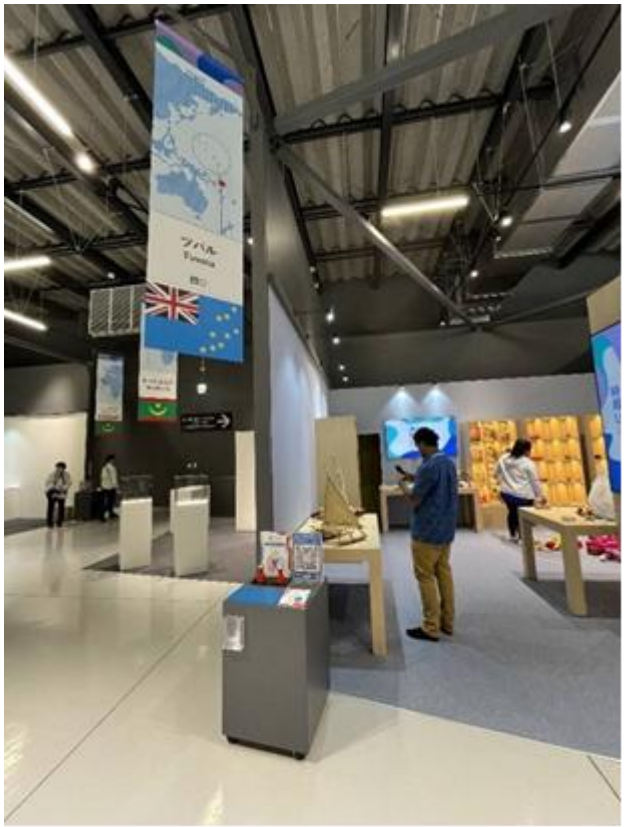
台湾の財団法人国際合作発展基金会(ICDF、日本の国際協力機構=JICA に相当)はその中心的な役割を担っています。これまでアジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの国々で、技術協力、奨学金プログラム、医療支援、インフラ整備を実施してきました。大阪万博は昨年 10 月 13 日に幕を下ろしました。万博会場内でも ICDF の取り組みに触れることができます。

たとえばアフリカのエスワティニでは、台湾・エスワティニの共同出資によって設立された同国の「女性起業家向け小口融資循環基金」により、善の循環がさらに拡大され、エスワティニ女性の経済的エンパワーメントに対する台湾の強いコミットメントが示されました。同基金が農村の女性に対する起業資金の提供に大きく貢献しています。また、太平洋の島国であるツバルには公衆衛生や農業を専門とする技術団を派遣しています。

台湾の民主主義、透明なガバナンス、技術力、そして人道的な精神は、国際社会において確かな価値を持つと確信しています。持続可能な世界平和を築くため、台湾は責任あるパートナーとして、自由・民主・平和の価値を共有しながら、世界と共に歩んでいます。



エスワティニパビリオン（万博会場コモンズ-A）



ツバルパビリオン（万博会場コモンズ-B）



ツバルパビリオンにおける台湾の国際協力像



万博会場コモンズ-B

全ての写真は本人撮影です

＜リトアニアと日本の新しい架け橋―チュルリョーニスの芸術＞



氏　　名：アウドリュース　サブーナス
任 命 年 度：令和元年度任命
出　身　地：リトアニア
在　住　地：東京都在住

日本では、過去から現代に至るまで最も優れた芸術家を 1 人選べと言われたなら、何方の名前が挙げられるでしょうか。本国のみならず、世界中に散らばった人口を数え上げても 450 万人に満たないリトアニア人にとっては、このような質問に答えるのは容易です。リトアニアで生まれ、短き 35 年の生涯のうちに、200 点以上の絵画を描き、およそ 400 曲を作曲した天才ともいうべき芸術家が存在しました。その芸術家の名はミカロユス・チュルリョーニス（Mikalojus Konstantinas Čiurlionis, 1875-1911）です。チュルリョーニスの才能は共感覚、いわば色聴に基づいていたという説があります。絵を描くときは音楽を聞き、ピアノを弾くときは色彩を想像していたかもしれません。彼が手紙の中で音楽について書くと、しばしば音楽の色調に言及している一方、彼の絵画の大半は音楽用語を題名としているからです。チュルリョーニスは日本と間接的に関係があり、その絆について本レポートでは取り上げます。

チュルリョーニスが生きていた間は、リトアニアと日本の関係はとても希薄で、日本を訪れたことがあるリトアニア人がほぼいない時代でした。彼自身も例外ではありませんでしたが、それでもチュルリョーニスには日本文化との交流が皆無であったとは言えません。彼の作品を観察すると、日本の芸術からの影響が浮かび上がります。チュルリョーニスが描いたテンペラ画には、日本の浮世絵の影響が見られます。彼の“Sonata No. 5 (Sonata of the Sea)”という絵画作品（1908 年、リトアニア共和国国立チュルリョーニス美術館所蔵，カウナス）と葛飾北斎による『富嶽三十六景』の一図である『神奈川沖浪裏』の類似は､加藤一郎という研究者によって 1976 年に既に指摘されているようです。チュルリョーニス自身がヨーロッパ各地で開催された展示会等を訪問し、日本の芸術に親しむ機会があったのか、あるいは他の芸術家の手によるジャポニズムの絵画作品を通じて影響を受けたのかについては、未だはっきりとわかっていません。但し、1906 年のチュルリョーニスの手紙には、日本の板絵、衣装、織物についての言及が見られます。チュルリョーニスの研究者である布川由美子氏によると、ワルシャワ、プラハ、ドレスデン、ニュルンベルク、ミュンヘンやウィーンで開催された展示会にて、日本の芸術を直接目にしていた可能性

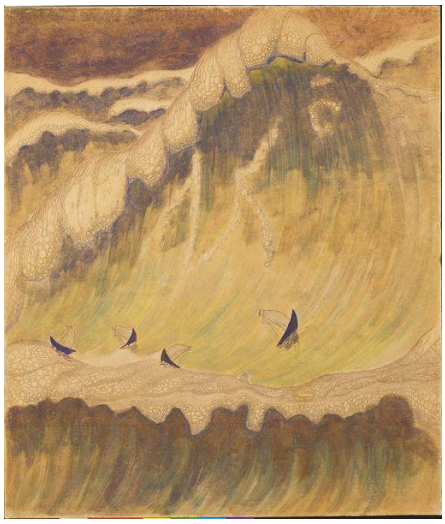
があるそうです。チュルリョーニスは国境や時代を越えた独自の幻想的な画風を創造した一方、他の欧州の象徴主義の芸術家と同様に、直接的あるいは間接的に、日本美術から影響を受けたことも間違いありません。

もう一つの絆は、『荒城の月』等で有名な作曲家である瀧廉太郎との関わりです。1901 年 10 月には、二人とも同時期にライプツィヒ音楽院に留学していたという記録が残っています。両者はザーロモン・ヤーダスゾーン（Salomon Jadassohn，1831-1902）に作曲や音楽理論を学んだという記録が残っていますが、お互いに面識がなかった可能性が高いと考えられています。残念ながら、才能溢れる音楽家であった瀧廉太郎は肺結核を患い、1903 年 6 月 29 日にたった 23 歳で逝去しました。若くして夭折した芸術家同士という、両者の不思議な共通点が 2025 年 8 月にリトアニアで公演を行なった Chorus INFINI という女声合唱団によって想起され、プログラムの中に組み込まれました。チュルリョーニスの作曲した作品の他に、瀧廉太郎の曲も演奏されたということです。

チュルリョーニスの画業は、19 世紀末にウィーンで活躍したグスタフ・クリムト（Gustav Klimt, 1862-1918）のような象徴主義の芸術家ほどではありませんが、日本でも一定の方々に知られているようです。グローバル化の影響で、ジョナス・メカスという映像作家（Jonas Mekas, 1922-2019）や、イラストなどで知られるスタシス・エイドリゲヴィチウス（Stasys Eidrigevičius, 1949-）等のリトアニア人アーティストの作品も知られるようになりましたが、依然としてチュルリョーニスは最も偉大なリトアニアの芸術家として存在し続けています。

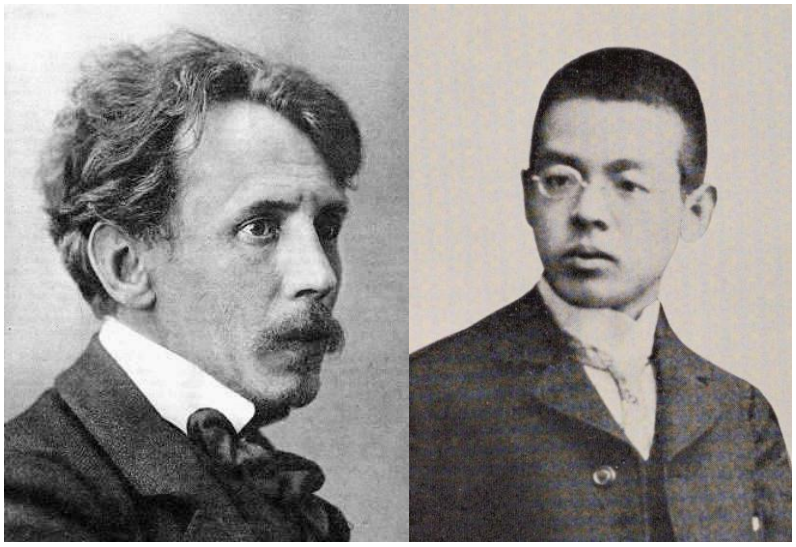
日本ではじめてチュルリョーニスの原画が展示されたのは、1992 年に東京のセゾン美術館（旧西武百貨店池袋店、1999 年に閉館）で開催された、「チュルリョーニス展：リトアニア世紀末の幻想と神秘」という展覧会においてでした。チュルリョーニスの音楽は、関西で演奏されたことがあります。1995 年にリトアニア国立交響楽団が、1999 年にリトアニア人ピアニストのペトラス・ゲニューシャス（Petras Geniušas, 1961-）が、それぞれチュルリョーニスの音を奏で、2025 年の大阪万博でも 7 月 6 日の建国記念日に、同じくペトラス・ゲニューシャスやジャズ・サックス奏者のペトラス・ヴィシュニャウスカス（Petras Vyšniauskas, 1957-）によって、チュルリョーニスの曲が演奏されました。

2026 年 3 月から 6 月にかけて、東京の上野にある国立西洋美術館にて、チュルリョーニスの大回顧展である「チュルリョーニス展 内なる星図」が開催されます。もし東京を訪れる機会があれば、是非ご覧になってください。素晴らしい芸術はきっと日本とリトアニア両国の新しい架け橋となることでしょう。




チュルリョーニスの“Sonata No. 5(Sonata of the Sea)”と葛飾北斎の『富嶽三十六景』の一図である『神奈川沖浪裏』

“Sonata No. 5(Sonata of the Sea)”
1908年、テンペラに紙、73.2 x 63 cm, リトアニア共和国国立M. K. Čiurlionis美術館所蔵：Čt 14, Kaunas



ミカロユス・チュルリョーニスと瀧廉太郎
道は交わったものの、彼らは出会わなかったかもしれない

＜新疆紀行＞



氏　　名：李帆（リ　ハン）
任 命 年 度：令和 3 年度任命
出　身　地：中国
在　住　地：大阪（市）在住

私の専門は中央アジア史である。2025 年の夏、私は大学の同窓、先生たちと現地ガイドの案内のもと、中国新疆ウイグル自治区で 2 週間にわたるフィールドワークを実施した。その道中で感じたことを、ここに少し共有したい。



新疆の気候は実に多様である。東西に横たわる天山山脈、広大な草原、そしてタクラマカン砂漠。中国の広大さと数多くの秀麗な景観を改めて実感させられた。

中国は漢民族を主要な構成とするが、その他に 55 の少数民族が存在する。彼らは漢民族とは文化、生産様式、生活習慣、言語を異にすることがある。その中でも、中国北方の草原地帯で牧畜を営む遊牧民族は大きな割合を占めている。中国の歴史において、農耕文明を持つ漢民族と、興亡を繰り返す北方の遊牧民族との間の戦争、交易、和親などは、一つの主軸であった。中国人であり、関連分野の研究者である私でさえ、遊牧生活への理解は十分とは言えない。新疆には十数もの少数民族が暮らしており、まさに少数民族の博物館と称するにふさわしい。



現地の遊牧民の生活を実感するため、私たちはなるべくホテル泊を避け、牧草地にテントを張り、自ら食材を調理するという方式を選んだ。遊牧民族のゲル（パオとも、伝統的移動式住宅）の近くに設営することで、彼らと深く交流する機会も得やすかった。

まず印象的だったのは、近代以降、遊牧生活にも大きな変化が生じているという点だ。遊牧民の話では、彼らの多くは近隣の町や都市に不動産を所有しているという。冬の間は遊牧を休止し、市街地の家で越冬するのだそうだ。訪れた現地のドキュメンタリー監督も、「今や純粋な意味での遊牧民はほとんど残っていない。ほとんどがこのような半定住・半遊牧の生活様式だ」と語っていた。そもそも遊牧という選択は、その地域の気候が農耕に適さないがゆえのもので

あり、古来、天候のリスクに大きくさらされるものであった。かつての遊牧生活は、人々の主体的な選択というよりも、環境がもたらした客観的な結果だったのだ。現在のように安定して越冬できる条件が整えば、喜んで受け入れるのも当然だろう。また、各家の遊牧民はほぼ例外なく馬の代わりにオートバイを保有している（もちろん、馬も今なお使われている)。家財や家畜の運搬にはトラックを用いる者もおり、以前であれば荷車だった部分が代替されている。これらは彼らにとって、生活の向上に他ならない。

さらに、少数民族の中には現代社会で就職したい者もおり、そのためには教育を受けることが重要となる。私たちの研修期間中はちょうど夏休みで、遊牧民の家庭の小学生くらいの子どもたちは、両親と共に草原で生活していた。彼らに尋ねてみると、学期中は都市部の学校に通い、夏休みにしか草原に戻れないため、この時期がとても楽しみなのだという。彼らは日中、子羊を連れて観光客と一緒に写真を撮ることで儲けていた。あどけない年頃の彼らにとっては、草原で思う存分に駆け回ることが、何より幸せな時間なのであろう。



気づいたことの一つに、子どもたちとその親の間では民族言語（カザフ族なのでカザフ語）が話されているが、私たちとの会話や、子どもたち同士の会話では中国語が使われており、その流暢さは親の世代より明らかに優れているという点があった。その原因を尋ねると、学校では中国語での授業が行われ、中国語を話すよう求められ、少数民族言語の使用は禁止されているという。近年、少数民族地域で現地語教育が縮小されているというニュースを目にすることもあり、私はいくばくかの残念を感じた。しかし、さらに掘り下げてみると、彼らの通う学校のクラスには、漢族、カザフ族、ウイグル族、ウズベク族、モンゴル族、シベ族など、実に様々な民族の子どもたちが在籍しており、それぞれ言語が異なるのだ。多様な言語で授業を行うことは不可能であり、その点は理解できた。さらに考えば、特定の生産様式のもとで育まれた民族言語は、往々にして語彙が限られている場合が多く、中等教育以降の各教科で用いる専門用語が存在しないこともある。従って、普及度が高く専門語彙の豊富な中国語で教育することが、最も便宜的な解決策とも言えるであろう。なぜ学校で民族言語の使用が禁止されているのかと問うと、子どもたちは「異なる民族の子ども同士がふざけて悪口を言い合っても、同じ民族の先生でなければ理解できず、注意できないからだ」と答えた。つまり、いたずらや衝突を未然に防ぐための措置でもあるようだ。各民族の言語文化を守りつつ、少数民族の子どもたちに同等の教育水準を保障し、漢族の生徒と公平に試験や競争に参加できるようにすることは、確かに難しい課題である。そして、子どもたちは親元に戻れば、アイデンティティの観点から、民族言語を用いることが求められるという、使い分けが自然になされている。

遊牧民のゲルの背後に、一枚のソーラーパネルが設置されているのが目に留まった。尋ねてみると、地方政府が各世帯に無料で取り付けたものだという。都市部のような贅沢はできないものの、夜間の照明と携帯電話の充電を対応するには十分である。実際、夜になるとゲルの中で子どもたちが携帯電話を操作している姿が見られた。また、新疆を移動する道中、広漠たる草原や砂漠の縁に、風力発電や太陽光発電の施設が何キロにもわたって連なっている光景を何度も目にした。現地の環境を損なわないことを前提に、国が地域の資源や特性を活かした開発を進め、経済的な創収を図っていることを目で感じた。

今回の新疆調査では、歴史専攻者としての収穫に加え、多様な民族がこの地で共に生活している情景を目の当たりにすることができた。また、遊牧民もまた、より安定した、より質の高い生活を当然、希求していることを理解した。中国は、各民族の団結を強固にし、人々の生活と教育に対する願望を実現すべく、今後も努力を続けていくことだろう。





＜「瀋水」の北――瀋陽＞

氏　　名：馬 韵婷（マ　インテイ）
任 命 年 度：令和４年度任命
出　身　地：中国遼寧省
在　住　地：京都市在住



私の出身地である瀋陽は、私にとって特別な魅力を持つ都市である。中国東北地方、遼寧省の省都として知られるこの街の名は、市内を流れる古い河川名「瀋水」に由来し、その北側に位置することから「瀋陽」と呼ばれるようになったという。

瀋陽は四季の移ろいがはっきりしている。夏の七月には気温が三十度前後まで上がり、冬の一月には氷点下二十度を下回ることも珍しくない。降り積もる雪の中で、子どもの頃に家族や友人とスキーに出かけた記憶は、今でも冬の澄んだ空気とともに鮮やかによみがえる。

この街のもう一つの魅力は、民族文化の豊かさにある。漢民族が多数を占める一方で、満族、回族、朝鮮族をはじめとする多くの少数民族が共に暮らしている。街角には回族の清真料理店や朝鮮族の食堂が並び、異なる言語や食文化が自然に交わる光景は、瀋陽ならではの風景である。近年は朝鮮族料理の店が特に人気を集め、活気に満ちている。

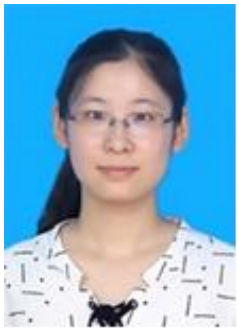
また、瀋陽は歴史の重みを宿した都市でもある。ここには後金の創始者であるヌルハチと、その後を継いだホンタイジの皇宮が残されている。のちに清朝が北京へ入関した後は、これらの宮殿は離宮として用いられた。北京の紫禁城と響き合う歴史の気配が、今も静かに街の空気に溶け込んでいる。



さらに、瀋陽は東北料理の宝庫でもある。酸菜と豚肉やスペアリブを煮込んだ鍋、鉄鍋でじっくり煮込む家庭料理、燻製した鶏ガラの深い香り――これらの素朴で力強い味わいは、近年中国各地でも人気を博している。

「瀋水」の北に広がるこの街は、自然、文化、歴史、そして食のすべてが重なり合って形づくられている。もし機会があれば、ぜひ一度、私の故郷・瀋陽を訪れてみてほしい。

＜万博のボランティアに参加してきた＞



氏　　名：李　沫（リ　マツ）
任 命 年 度：令和４年度任命
出　身　地：中国河北省
在　住　地：京都（市）在住

2025 年 4 月 13 日から 10 月 13 日まで、大阪・夢洲で国際博覧会、いわゆる万博が開催されました。私はそのボランティアに参加しました。

ボランティアは「会場ボランティア」と「大阪まちボランティア」に分かれており、私は会場ボランティアに参加しました。会場ボランティアの活動は、来場者への案内や美化活動の補助を行う「エリア活動」と、休憩所などの来場者サービス施設を補助する「運営補助活動」に分かれています。私はエリア活動に４回､アクセシビリティーセンターでの運営補助活動に１回参加しました。

活動中は、世界中から訪れた方々と会話をすることができました。また、同じチームの仲間と協力し合いながら活動しました。こまめに休憩を取ったり、夜の活動では虫よけを持参するよう案内があったりと、私たちボランティアへの配慮も行き届いていました。毎日の活動の最後には終了ミーティングがあり、それぞれが気づいたことや改善点を共有しました。会場の地図や備品の整備が日々改善され、より便利になっていく様子を実感しました。

特に印象に残っているのは、閉場時のお見送りです。チームごとに一列に並び、蛍光スティックと手を振りながら、帰路につく来場者の方々に「お疲れ様でした。ありがとうございました」と声をかけました。来場者の皆さんも笑顔で手を振り返し、同じ言葉を返してくださりました。ヨーロッパから来られた方が、いわゆるボウ・アンド・スクレープのように、足を少し引いて腰を折り、手を水平に差し出してお辞儀をしてくださったことや、子供たちとハイタッチをしたことも心に残っています。

ちなみに、会場へ向かう前には、蛍光スティックの色をそろえるために、チーム全員で輪になって「5・4・3・2・１」と数えながら同時にスイッチを押しました。時には押し間違えて、違う色になってしまう人もいました笑。特に夏の夜、シフトが終わって帰るときに感じた会場内の風は、とても心地よいものでした。

個人として、また京都府名誉友好大使として、万博の開催に少しでも貢献できたことを誇りに思っています。そして、多くの貴重な体験ができたことを大変嬉しく感じています。私にとって、かけがえのない大切な思い出でした。



＜京都産業における専門人材としての実務活動報告＞

氏　　名：王子懿（オウスイ）
任 命 年 度：令和６年度任命
出　身　地：台湾桃園市
在　住　地：京都（市）在住



一．はじめに｜留学生から専門人材として京都産業に従事

私は台湾出身で、約 10 年にわたるデザイン実務経験を有しています。専門性の向上と国際的な視野の拡大を目的に 2022 年に来日し、京都精華大学大学院グラフィックデザイン専攻を修了しました。現在は、京都の地元企業にてデザイナーとして勤務し、ウェブデザイン、ビジュアル設計、企画協働などの業務に携わっています。

学生時代は「学ぶ立場」として京都の文化や社会に触れてきましたが、就業後は「専門職」として、企業の対外発信や事業運営に実務レベルで関与する立場へと役割が変化しました。これまでに培ってきたデザイン力および多文化コミュニケーションの経験を、京都の産業価値の向上および国際発信力の強化に還元することを意識して取り組んでいます。

二．業務内容・実務実績と自身の役割

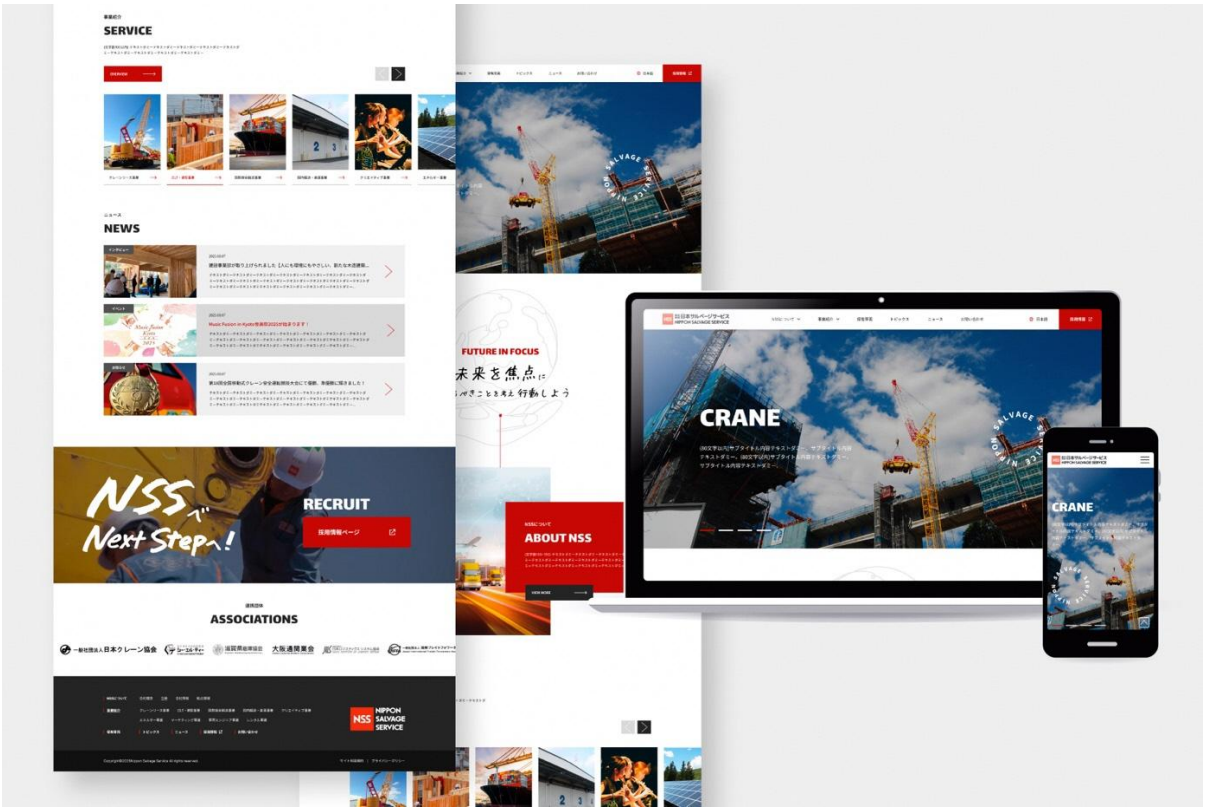
現在勤務している会社は京都の地元企業であり、主に「企業ウェブサイトおよびデジタル情報発信の整備」を軸として、地域企業の情報整理や対外コミュニケーション品質の向上を支援しています。また、国際市場を視野に入れたブランド関連プロジェクトや、京都を活動フィールドとした AR を活用した体験型施策において、主にデザインおよび関係各所との調整業務を担当しています。

私自身は、企画整理、設計実装、社内関係者との調整、タスク・スケジュール管理、エンジニアとの連携、ならびに多言語コミュニケーションを横断的に担い、プロジェクト全体の進行が円滑に行われるよう、設計・調整・進行管理の面から支援する役割を担っています。

以下に、実際の業務内容と代表的な実務実績をまとめます。

Ⅰ．企業公式サイトの更新・情報デザイン

企業公式サイトの刷新プロジェクトにおいて、初期ヒアリングおよび情報整理から、サイト構造設計、主要ビジュアル制作、社内関係者との調整、タスク管理、スケジュール管理、エンジニアとの連携および全体進行管理まで設計および進行管理の観点から継続的に担当しました。これにより、企業情報の可読性および対外信頼性が向上し、国内外の関係者に対する安定した情報発信基盤の整備に貢献しました。



▲ 企業公式サイト（レスポンシブ対応）デザイン案

Ⅱ．日本酒ブランドの海外展開・ビジュアル統合

京都産日本酒を中心とした海外向けプロジェクトにおいて、パッケージデザイン、印刷調整、商品撮影、広告ビジュアルの企画・制作、海外マーケティング会社との連携において、主にデザイン調整および情報整理を担当しています。京都および日本らしい美意識や文脈をデザインに反映し、京都産日本酒の品質・文化的背景・産地としての価値を海外市場へ的確に伝える表現設計を行っています。





▲ 京都産日本酒海外プロモーション用 商品ビジュアル（デザイン担当）

三．AR および体験型イベント企画・制作

京都を活動フィールドとし、AR 技術と展示設計を組み合わせ、リアルなイベント空間とデジタル施策を連動させることで、参加体験およびブランドコミュニケーションの向上を図る体験型コンテンツの企画・制作に携わっています。イベント現場の活性化や、新しい表現手法の導入を通じて、若年層や海外来訪者の関心喚起にも寄与しています。

これらの実務を通じて、設計力に加え、プロジェクト推進力、部門間調整力、異文化理解力を統合した実践的な専門性を形成しています。

京都で実施された AR 体験型イベントの様子 ▶



AR子ども体験して

AR技術を使った体験施設の内部。スマホ画面にはキャラクターが現れ、一緒に写真をとることもできる（大山崎町大山崎・ATVK）

あす大山崎 施設お披露目

スマホ見ながら迷路探索

大山崎町大山崎のアート&テクノロジー・ヴィレッジ京都「ATVK」に入居する「日本サルベージサービス」（京都市伏見区）が、拡張現実（AR）技術を利用した子ども向けの体験施設を作った。スマートフォンの画面を見ながら、迷路を進み、現実にはいないキャラクターの探索を楽しめる。31日にATVKで開かれるハロウィーンイベントでお披露目する。

施設は横幅が広がるトラックの荷台を活用。「シネマティックR」技術を利用したアプリを使って暗い荷台部分に入ると、画面上に迷路のような壁と進行方向を表す矢印が現れる。画面を見ながら進むと、かわいらしいカボチャやおばけなど5種類のキャラクターが登場し、一緒に写真を撮ることもできる。参加費は1人100円で、キャラクターが描かれたステッカーも贈る。

企画した瀬端玲奈さんは「現実世界と幻想の世界の組み合わせを体験し、『こんなものもあるのかと驚いてほしい』と話していた。同社の大崎康弘社長（58）は「さまざまな技術の応用をシネマトラックでできることを示したい。子どもたちにもぜひ楽しんでほしい」と期待を語った。

31日に開かれる「ATVKハロウィーンナイト」は午後5時から午後9時。入場無料。キッチンカーが出店するほか、仮装コンテスト（午後6時）や無料ダンス教室（同7時）などもある。（尾関和美）

❶横幅を広げた荷台でAR技術が体験できるシネマトラック
❷画面上に現れたカボチャをモチーフにしたキャラクター

四．京都への実質的な貢献

上記の活動は、主に以下の 3 点において京都への貢献につながっています。

1．**京都企業の国際発信力の強化**
　多言語対応を前提としたウェブ設計および情報整理により、京都企業が海外へ安定的に情報発信できる基盤構築を支援しています。

2．**京都の伝統産業の海外展開支援**
　日本酒ブランド案件を通じ、京都産製品の文化的価値や品質を国際市場へ適切に伝達する役割を担っています。

3．**京都におけるイベント活性化と新たな体験価値の創出**
　AR 技術を活用した体験型コンテンツにより、イベント会場に新しい表現手法と参加体験を導入し、若年層や海外来訪者の関心喚起に寄与しています。

　また、日本語・中国語のバイリンガル対応を活かし、社内外の円滑な国際コミュニケーションの促進にも貢献しています。

五．今後の展望

　今後は、「専門性を活かした地域価値の創出」と「国際的な橋渡し役」という二つの軸を意識し、以下の方向性で活動を継続していきたいと考えています。

1．京都企業の海外発信を支えるデザイン基盤の強化
2．文化・観光・教育分野における体験型コンテンツの展開
3．台湾と京都をつなぐ人材・文化・産業ネットワークの深化

　名誉友好大使として、単なる参加者にとどまらず、自身の専門能力を通じて京都の国際的価値向上に継続的に寄与していきたいと考えています。

＜2025 年大使活動振り返り＞



氏　　名：XIAN YUXIN（カンウキン）
任 命 年 度：令和 6 年度任命
出　身　地：中国大連
在　住　地：京都（市）在住

2025 年は大使として活動した二年目である。一年目と比べて、イベントや派遣仕事に参加する機会はだいぶ減ったと自覚している。

今年の活動の中で、一番印象に残っていたのは、「R7 京都府名誉友好大使定例会・研修 in 美山」であった。大使同士で集まり、交流をするのは、おそらく最初の任命式以来、これが初めてだった。

その日は朝９時ごろに京都駅の南側で集合し、そこから美山までバスで移動した。前日からの土砂降りで、これから始まる遠征にあまり乗り気ではなかった。バスに乗り込み、先に前列で席を見つけた人たちの中で、これまで何回か大使の仕事が一緒だった人もいることを横目で確認した。

出席確認が済んで、バスは発車した。先程まで大使たちの出席確認していた日本人女性の方がマイクを持ち出し、今日の目的と行程、簡単な自己紹介をしてくれた。この方がいつも大使に関する連絡をメールでしてくれている方だと分かった。それから、一人ずつバスの最前列に行って、マイクで自己紹介をした。出身国、日本で在籍している大学や研究室、最近行った大使活動などを３分間ぐらいで話した。自分と同じ文化に関心のある人が多く、少しこの後の交流が楽しみになっていた。

美山に着き、最初は村から少し離れたところのカフェ兼宿泊施設にバスが停まった。今日はここでお店の人に協力してもらって、お昼ご飯を作る予定だと教えられた。メニューは炊き込みご飯と豚汁、きな粉を使ったお団子だ。大使たちは三班に分かれて別々で作業をすることになった。時間も時間だったので、ほとんどの仕込みはお店の方がすでにすましてくれていた。私たちの仕事は、用意された食材を鍋に入れて、適宜にお玉でかき混ぜる。それだけだった。待つ間、あちこちで会話が盛り上がった。仕事のこと、研究のこと、日本での日常またはお悩み。ミャンマやマレーシアの子もいたが、ほとんどの人は中国語で話せたので、久しぶりに中国語での会話を楽しんだ。日本語での会話は、テンポ感がとても大事にされており、「このタイミングでこの言葉を発する」といった、カードゲーム感覚での会話が多いと、普段から感じている。一方、中国

語はぎこちなくても大して気にしない。少しタイミングを外しても、発している言葉と本当に言いたいことの意味合いが少しずれてもいいので、だいぶ楽に感じる。

食事を終えて、お店の人に感謝の言葉を伝えて、私たちは再び出発した。バスで十五分ぐらい移動したところで降りた。ここでは、地域の人に案内してもらって、軽く村中をツアーしてもらった。私は美山に来るのが 2 回目だった。1 回目では地元の地域おこしの方たちが実施したイベントのボランティアとして丸一日しっかりとこの地域と関わった経験があったので、今回のツアーに大して期待してなかった。しかし、他の大使が周囲の環境や建築物について、非常に意欲的に質問している様子を見て驚いた。「この紋様はもしかしてこれを意味している？」「あそこの家とこっちの家のここが違うのは何か意図はある？」「日本についてこういう記載を読んだことがあるんだけど、もしかしてそれを表している？」などと、次から次へと質問が飛び出していた。おかげで、前回美山に来た時と全く違う風景を見ることができた。

最後に村の中にある神社にて稲わらで「しめ縄」づくり体験をした。今回作るのは、正月の時玄関などで飾るタイプのしめ縄である。手のひらサイズで、手土産として持ち帰るのがちょうどよかった。



＜大使活動から得られたこと＞

氏　　名：Trần ThịTrúc Linh（チャンティツックリン）
任 命 年 度：令和６年度任命
出　身　地：ベトナム
在　住　地：京都市在住



大使の活動で中学校・高等学校に訪れることが殆どである。人の前に出ることが苦手ではないが、教職は自分に合わないとずっと前から思っていた。しかし、その意識を克服したく、京都府名誉友好大使になってからは、積極的に講師の活動を選び、参加していた。

初めて教壇に立つ時の緊張感はまだ鮮明に覚えている。上手く話せないことや伝えきれないことが沢山ある拙い発表だったが、日本人の学生さんと担任先生はみな、真剣に聞いて、関心を寄せてくれた。ベトナムのことは詳しく知らない方が多いが、ベトナム料理であるフォーは給食で食べたことがあると教えてくれることが何回かあり、日本学校の給食で様々な国の料理が出されるのを知った。大使の講演を含めて、日本の学校では、異国文化と接する機会が多く与えられていることもわかり、非常に良い環境だと思い、感心した。

数回の活動を経た後は、内容を工夫し、堂々と話せるようになり、自分の成長を強く感じた。講演後に交流するときは、シャイな学生さんもいるが、気になる話について質問したり、知らない遠い国の話なのに興味を持ったりする健気で眩しいその姿に感銘を受けた。後日に学校からのフィードバックをもらい、学生さんの暖かい言葉に沢山励まされた。

大使になることで、合わないと思っていたことに挑戦できたおかげで、やってみないとわからないことがまだ多くあると痛感した。そして、自国の話をする機会が恵まれて、沢山の人に知ってもらうことができ、非常に誇りに思った。私は日本という国を知り興味を持ったからこそ、新しい世界を知るようになり、様々な体験もでき、人生が豊かになった。そのため、大使活動を通じて、日本人の方々のそのきっかけとなれたらと思っている。

＜私と共に海を渡った京都＞



氏　　名：HAMID ABDUL FAUZAN（ハミド
　　アブドゥル　ファウザン）
任 命 年 度：令和 6 年度任命
出　身　地：インドネシア
在　住　地：オランダ・アムステルダム市在住

大学院進学のために京都を離れてから、早くも 9 ヶ月が経った。海外での生活により、名誉友好大使としての活動に直接参加することはできなかったが、だからといって大使としての経験や自覚を忘れたわけではない。実は、アムステルダムでの現在の生活の至る所に、京都での日々の名残がある。それは日本から持ってきた小物であったり、あるいは今の私に染み付いた日本文化の感覚であったりする。

アムステルダムの新居での最初の数日間は、荷解きに費やした。その荷物の中には、2024 年に井手町での研修で作った「桝」があった。日本に住んでいた頃は、棚の奥で埃をかぶっていたこの桝だが、今では炊飯器にお米を入れる計量カップとして愛用している。桝を手にするたび、餅つきをしたことや、観光地づくりに励む地元の方々と語り合ったことなど、井手町での楽しい思い出を、はっきりと思い出す。

物理的なモノだけではない。ここでの私の生活様式そのものにも「日本」が息づいている。夕食にはよく日本のカレーを作るし、洗面台の棚には使い慣れた日本の製品が並んでいる。また、日本や京都に関するニュースも欠かさずチェックしている。

将来的には、京都とアムステルダム、そして私の故郷であるジャカルタをつなぐような活動に、積極的に関わっていける機会があればと願っている。

＜近況報告レポート＞



氏　　名：莫　雪梅（バク　セツバイ）
任 命 年 度：令和６年度任命
出　身　地：中国・四川省
在　住　地：京都（市）在住

名誉友好大使として活動する中で、私は「交流とは一体何なのだろうか」という問いを繰り返し考えるようになりました。

今年度も、小学校・中学校・高校との交流イベントに複数回参加しました。交流の場では、中国舞踊を披露したり、中国の伝統的な遊びである「踢键子」を一緒に体験したりしました。また、イベントに参加する際は、毎回民族衣装を身にまとって臨みました。

図１：八木東小学校で中国舞踊を披露した



図 2：民族衣装でイベントに参加した



学生たちとの交流で私が大切にしているのは、「役に立つ知識」を教えることではありません。知識については、彼らはすでに学校で十分に学んでいます。それよりも、自分の目で見て、感じて、少しでも興味を持ってもらえたら、それで十分だと思っています。

そして何より心を打たれるのは、相手が私自身や私の文化に興味を持ち、理解しようと真剣に向き合ってくれる姿です。その純粋なまなざしに触れるたび、交流の本質を実感します。

こうしたイベントに参加するたび、私はいつも一つの疑問を抱きます。「なぜ、民族衣装や遊び、舞踊といったシンプルなものを通じて、人はこれほど自然に交流できるのだろうか」

私なりにたどり着いた答えは、「芸術には国籍がなく、偏見もない」ということです。そこでは私たちは国や立場を超え、ただ一人の人間として向き合い、何らかの形で心を通わせています。

これまで見たことのないもの、聞いたことのないものに好奇心を持ち、相手を理解しようとし、尊重する姿勢そのものが、交流の本質なのだと思います。そしてその姿勢こそが、今の社会においてとても大きな意味を持っていると、私は感じています。

＜価値観が揺らいだ瞬間から考える日韓交流＞



氏名：洪 サラン（ホン サラン）
任命年度：令和 6 年度任命
出身地：韓国
在住地：京都市在住

筆者は韓国・ソウル出身で、現在は京都大学に在学しながら、京都府名誉友好大使として活動している。日本に来て四年が経ち、友好大使としての活動も二年目を迎えた現在、筆者は日本で生活する外国人として、また日本と韓国をつなぐ立場として、自身の価値観にどのような変化が生じたのか改めて考えるようになった。本レポートでは、京都で友好大使として活動する中で、筆者の内面に生じた価値観の揺らぎについて述べる。

筆者の出身地では、人との距離が比較的に近く、自分の意見を持ち、それを周囲と共有することは、特別な行為ではなく、ごく自然なものだと感じて育ってきた。韓国人から見た京都は、歴史の深い都市であり、日本文化の象徴のようなものである。筆者は京都の美しい自然、特に京都市の鴨川の雰囲気に魅了され、京都に住むことを決めた。人と人の距離が程よく保たれ、静かな時間が流れるその空間は、筆者にとって新鮮で魅力的に映った。しかし、生活を重ねる中で、筆者の価値観にも大きな変化が見られた。

まず、日本人から見た自分は、自分の発言や行動が、個人ではなく「韓国人」として受け取られる場面が多いことである。韓国人として日本人と人間関係を作る時も、個人より韓国人として受け取られることが多いのではないかという不安も感じた。何かを話すときは無意識的に背景を説明したり、立場を代表して話したりする場面が多くなるほど、筆者は、自分の人格の本質についての価値観が揺らぎ、多少のストレスも感じた。さらには、このような状況の中、京都という都市に住みながら、新たな問題に直面することになった。京都は筆者がもともと育った環境とは全く異なる文化を持っていて、特に近所の人々との距離感など美しいが、少し寂しい環境でそのような不安は大きくなっていた。

令和 6 年度より京都府の名誉友好大使として活動を始め、約 1 年間その活動を続けてきた。現在筆者は、友好大使として日本と韓国をつなぐことの意味を徐々に理解できるようになり、当初抱いていた不安も次第に解消されてきたと感じる。1 年間活動を通じて筆者が強く感じたのは、友好とは単にお互いを好きになることではなく、お互いの相違点を理解し、未知の領域に足を踏み出そう

とする姿勢そのものにあるということである。京都に憧れて住み始めた筆者が、自分なりのストレスに気づいた時は、まだ京都のことを十分に理解しようとしていなかったのではないかと考えるようになった。京都の小学校で韓国文化を紹介したり、京都の文化を紹介してもらったりしながら、筆者は京都の様々な場所で情を感じることができ、少しずつ京都への理解が深まっていると実感している。また、京都に住む韓国人や京都を訪問する韓国人に向けた翻訳や解説作業に携わる中で、多様な背景を持つ人々の役に立てているという手応えを得た。韓国人を代表する立場として感じていた重圧は時代に誇りへと変わり、外国人として京都に暮らすことへの魅力を、より強く感じるようになった。

筆者は京都で生活する中で、自身の価値観が大きく揺らぐ経験をしたが、それは何かを失ったという経験ではない。むしろ、価値観が揺らいだことで、京都を見る視野が広がり、自分自身や周囲の人々に対する意識をより深めることができたと考えている。友好大使として活動する中では、互いに理解しきれない部分は生じることも避けられない。しかし、そのような違いを前提にした上で、それでも関わり続ける立場にあることこそが、友好大使の役割であると筆者は認識している。今後も、友好の本質的な意味を問い続けながら、日本と韓国をつなぐ立場としての在り方を模索していきたい。

＜近況報告レポート＞



氏　　名：李　明（リ　ミン）
任 命 年 度：令和６年度任命
出　身　地：中国　山東省
在　住　地：京都（市）在住

１．出身地について

私の出身地は、中国山東省滕州市である。
山東省は、中国において古くから「礼」と「学」を重んじる地域として知られており、孔子の故郷である曲阜、孟子の故郷である鄒城、そして墨子の故郷である滕州は、互いに百里にも満たない距離に位置している。これら三人の思想家を輩出したことから、この地域は「百里三聖人」と称されている。

滕州市は、深い歴史と文化的背景を有する都市であり、中国古代の思想家である墨子、ならびに工匠の祖とされる魯班（公輸班）の故郷としても知られている。古くから学問を尊び、道徳と実践を重視する文化が育まれてきた。

私は、このような環境の中で、家族や地域社会との関わりを通じて育ち、他者と協力することの大切さや、学び続ける姿勢の重要性を自然と身につけてきた。現在、日本において研究活動や地域交流に携わる中でも、出身地で培った価値観が自身の行動の基盤となっている。

２．出身地の人々から見た「京都」

出身地の人々にとって、京都は「日本の歴史と文化を象徴する都市」として広く認識されている。
中国では、京都は長い歴史を有する古都であり、伝統文化が大切に受け継がれてきた特別な都市というイメージが強い。

一方で、実際に京都で生活し、大学において研究活動を行いながら地域社会と関わる中で、京都は単なる観光都市ではなく、大学・研究機関・地域住民が密接につながる学術都市であることを実感している。
こうした京都の多面的な魅力を、出身地の人々にも伝えていくことが、名誉友好大使としての重要な役割であると考えている。

３．名誉友好大使として活動する中で考えたこと・感じたこと

名誉友好大使として活動する中で、国際交流とは一方向的な情報発信ではなく、相互理解を積み重ねていく営みであると強く認識するようになった。

私は、京都大学の博士課程学生として研究活動に取り組むと同時に、留学生と地域住民をつなぐ交流活動や、文化紹介を目的とした講座・イベントの企画運営などに関わってきた。これらの活動を通じて、文化や言語の違いを越えた対話の場をつくることの重要性を学んだ。

地域の方々と直接交流する中で、留学生が地域社会に参加する意義や、地域が国際化していくことの価値を実感し、名誉友好大使としての責任とやりがいを強く感じている。

４．その他近況報告

現在、京都大学において理学分野の博士課程に在籍し、研究活動を継続している。また、留学生コミュニティの運営や、自治会・地域団体との連携を通じて、学術交流にとどまらない草の根レベルでの国際交流にも引き続き取り組んでいる。

今後も、研究者としての専門性と、京都府名誉友好大使としての立場を活かし、京都と海外、そして京都と地域社会をつなぐ架け橋として活動を続けていく所存である。

＜私の目に映る深圳＞



氏　　名：曾　海婷（ソウ　カイテイ）
任命年度：令和７年度任命
出　身　地：中国広東省深圳市
在　住　地：京都市在住

「深圳（しんせん）はどこ？」と、よく日本人の友達から聞かれる。そのたびに「中国の南の方で、香港のすぐ上にあるよ」と答える。けれども、それだけで深圳という都市の魅力はほとんど伝わらない気がしている。深圳は、私にとって単なる地名ではなく、私とともに成長してきた特別な都市だ。



図１　深圳の位置

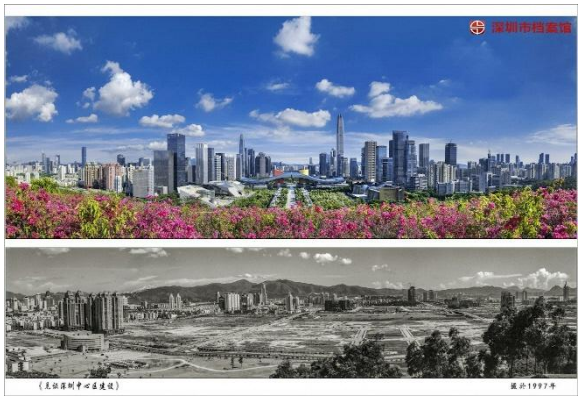


図２　深圳の変化

深圳は、中国の広東省にある都市だ。深圳は1979年の改革開放をきっかけに、小さな漁村から一線都市へと成長し、中国の改革開放を象徴する都市となった。かつての漁村の面影は、今ではほとんど残っていない。高層ビルが立ち並び、ショッピングモール、地下鉄が次々と建設されている。当時、全国各地から多くの人々が仕事を求めて深圳に集まった。彼らは「深一代」と呼ばれ、その子ども世代が「深二代」だ。私は、その深二代として深圳で育った。

深二代として生きていると、「出身」というものがいつも少し曖昧に感じられる。「広東出身なら、広東語を話せるでしょう？」と聞かれることは少なくない。私が「話せない」と答えると、多くの人が驚き、「それでも広東人なの？」と言う。このような経験は、多くの深二代に共通するものだと思われる。

確かに私は深圳で育ったが、広東語は話せないし、自分を伝統的な意味での「広東人」だと意識したこともほとんどない。このような曖昧な立場は、場所によってよりはっきりと感じられる。両親の故郷に行けば、私は「深圳の人」と呼ばれ、深圳にいれば「本当の地元の人ではない」と言われることもある。だから、私は「広東人」と言うよりも、「深圳人」と名乗るほうが自然だと感じ

ている。

私の両親はともに重慶出身で、家では重慶方言が使われてきた。学校では、クラスメイトの多くも「深二代」で、普通話を使っている。広東語が少し聞き取れるものの、実際に使う場面はほとんどない。こうした言語環境の中で育った私は、深圳を「地元と外部をはっきり分ける都市」だとは感じていない。むしろ、さまざまな背景を持つ人々が集まり、それぞれの居場所を見つけていく都市だと感じている。深圳における「地元」とは、血縁や方言によって決まるものではなく、そこで生活し、学び、時間を過ごしてきたかどうかによって形づくられるものだ。深圳でよく話す言葉は「来了就是深圳人（来たら、深圳人だ)」だ。



図 3　改革開放当時のスローガン

他の都市と比べると、深圳は実用性と効率性を重視する都会でもある。改革開放当時のスローガンである「时间就是金钱，效率就是生命（時間は金なり、効率は命なり)」という言葉は、今も深圳をよく表している。深圳には、北京ほどの重い歴史はなく、上海ほどの洗練さもないが、その代わりに若い都市だ。都市の歴史が短いだけでなく、深圳の人口の平均年齢が 32.5 歳（出典：中国第七次全国人口調査公報）であることも、その若さを示している。

深圳博物館を訪れると、その若さはさらに実感される。他の地域の博物館では古い文物が展示されているのに対し、深圳博物館では改革開放以降の労働者の生活や努力が多く紹介されている。それこそが、深圳という都市そのものの



歴史だ。

図 4　深圳博物館にある労働者の生活用品

深圳の変化の速さを最も実感したのは、南頭古城という深圳にある古い街の変化だ。子どもの頃、家は南頭古城の近くにあり、そこはただの普通の市場だった。道は狭くて汚く、人通りは多く、生活の気配に満ちていた。親と一緒に市場で買い物
をすることも多く、人混みの中で迷子になるのが怖くて、親の手を強く握って歩いていた記憶がある。ところが、2 年前に久しぶりに訪れた南頭古城は、まったく別の場所のようだった。カフェや展示スペース、デザイン性の高い店が並び、洗練さ
れた街並みに変わっていた。しかし、環境は整い、観光客も増えた一方で、親しんでいた生活感は次第に失われつつある。



図 5 昔の市場



図 6 今の南頭古城

（図 5 は実際の写真ではなく、記憶に基づいて選んだイメージに近いものだ）

このような変化に対して、私は新しさにわくわくしながらも、どこか寂しさを覚えた。発展を実感する喜びと、失われた日常への懐かしさの両方を抱えながら、深圳はこれまで成長してきたのだと思う。

参考文献：
国家統計局（2021）　『中国第七次全国人口調査公報』
地域経済ラボ（2024）　「中国のシリコンバレー誕生秘話②：深圳における改革開放と起業家精神」
URL:https://regionalstrategy-lab.com/regionalinnovation-shenzen/
（最終閲覧日：2026 年 1 月 10 日）
當代中國（2025）　「深圳改革開放巨變對比圖　從邊陲農業縣到國際大都市」香港新聞

URL:https://www.hk01.com/article/60222137?utm_source=01articlecopy&utm_medium=referral(最終閲覧日：2026年1月10日)

＜変種変量生産を支える鋳物輸入と Society5.0 のものづくり＞

氏　　名：方熠辰（ホウイシン）
任 命 年 度：令和 7 年度任命
出　身　地：中国上海市
在　住　地：京都府（京都市）在住



日本政府が目指す Society5.0 は、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させ，経済発展と社会的課題の解決を両立する新たな社会像である。この未来社会の実現には、あらゆる産業のものづくり基盤を支える工作機械（こうさくきかい）の進化が不可欠である。特に、筆者が研究で関わる五軸工作機械は，複雑形状の加工を高精度・高効率で実現し、変種変量生産への対応力を飛躍的に高める。自動車、航空宇宙、医療機器に至るまで、Society5.0 が必要とする多様な先端製品の製造には、五軸工作機械の役割がかつてなく重要となっている。

五軸工作機械の高精度加工を支えるためには、振動を抑え、高い剛性を持つ機械構造体が不可欠である。ここで重要な役割を果たすのが鋳物（いもの）部品（ベッドやコラム）である。鋳物は工作機械の土台であり、基礎の部分で精度と性能を支えている。

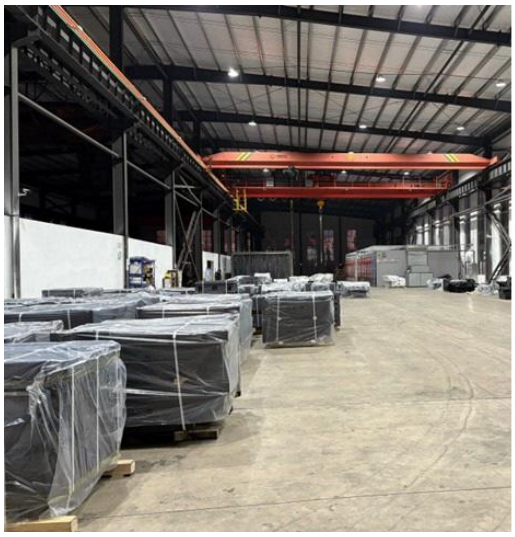
現在、中国は世界最大の鋳物生産国であり、世界全体の約半分以上を占める規模を有している。特に大型鋳物については、大規模生産能力とコスト競争力といった点で中国企業が強みを持つ。このような背景に、日本メーカが中国から工作機械用の鋳物を輸入するケースが多く存在する。

この度 2026 年 02 月 06～08 日にて、中国江西省（ジアンシー　ブシュー）撫州市東郷県（トンシャン）に位置する工場を訪問し、日本企業へ供給されている工作機械用鋳造（ちゅうぞう）部品の生産現場を見学した。



江西省・省都南昌市における都市計画展示館（南昌城市规划展示馆，NANGCHANG PLANNING EXHIBITION CENTER）での国際貿易（21 世紀シルクロード）と地理の関係を示す図．
都市計画展示館は地域の公民施設として無料開放され，筆者が最も好む観光スポットである．ここでは歴史の変遷から現在の都市計画，将来の発展構想までを模型や映像で総合的に紹介しており，ある都市・地域を理解するのに最も適切な場所である．これまでに上海，南京と南昌の展示館を巡っている．
本人撮影

鋳造工場の現場では大きく製造部と技術品質部に分かれている。製造部の下には、砂型製作から鋳造、ショットブラスト、仕上げまでの一貫生産体制が構築されている。また、技術品質部の下には、工芸設計から品質管理・検査をおこない、品質保証体制を支えている。さらに、生産計画や工程管理をおこなう部門も設けられ、効率的な生産体制が整備されている。



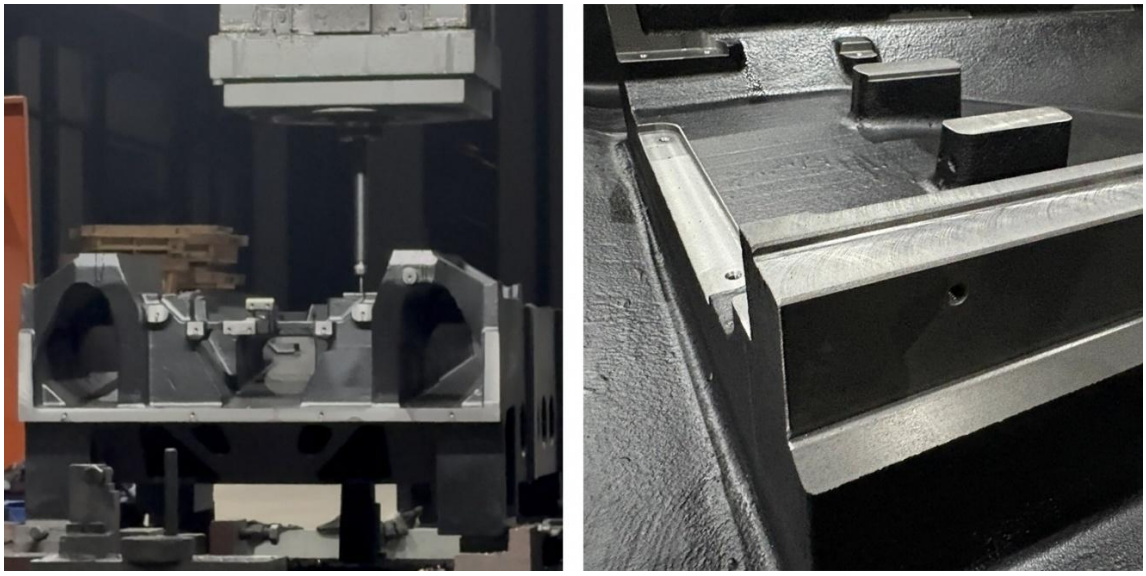


（左）手前に梱包済みで発注待ちの鋳物，奥に塗装工程の作業場．（右）陳列されている鋳物．
本人撮影

今回の訪問では、主に中仕上げ加工工程を見学した。

鋳造段階と粗加工を経て、鋳物は汎用的な形状で製作される。中仕上げは最終精度に近づけるための重要な段階である。中仕上げにおいて、ネジ穴、ガイドレール案内面（摺動面）の平面加工や基準面の形成などが施される。工作機械用ベッドやコラムは大型かつ重量物であるため、大型門型加工機をもちいる。

さらに、中仕上げは単なる精度向上工程ではなく、製造工程全体に大きな柔軟性をもたらす重要な役割を担っている。市場ニーズが多様化する現代では、顧客ごとに異なる仕様やオプション対応が求められる。すでに生産可能な状態にある中仕上げ部品によって、メーカは製造工程を迅速化し、より効率的に市場の需要に応えることができる。



（左）門型による中仕上げ．（右）中仕上げによる摺動面とネジ穴．
本人撮影

ここまで鋳造工場を例に中国の基盤産業の一端を紹介した。鋳造は目立たない存在ではあるものの、工作機械や産業機械を支える重要な技術である。

現在、アジア各国はそれぞれの強みを活かしながら製造業を発展させており、素材・部品・装置・完成品が国境を越えて循環している。鋳物の生産、機械加工、工作機械の製造といった工程も、そのような国際的なサプライチェーンの中で相互に支え合っている。

こうした分業構造は単なるコスト削減ではなく、技術の共有や品質向上、そ

して市場ニーズへの迅速な対応を可能にする仕組みでもある。

変化の激しい時代において、各国が得意分野を活かしながら協力することは、持続的な産業発展につながると考えられる。今後も、ものづくりを通じた相互理解と技術交流が、アジア地域全体の発展に寄与することを期待したい。



工場周辺にある一面に広がる菜の花畑に，黄色い花が咲き誇る様子．
本人撮影





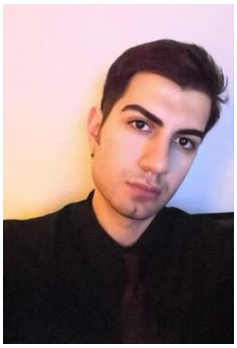
今回の見学において炉は映像のみによる解説であった．
（左）鋳鉄（ちゅうてつ）を溶解する際にもちいられる 6 トン電気炉．
（右）フラン樹脂砂型に溶湯（ようとう）を注湯している鋳造工程．
先方提供



春節(旧正月)休み前，工場作業員の皆さんで花火をする様子.
本人撮影



都市計画展示館:
(左上)民生用基盤システム(上下水)の紹介.　(右上)2035 年までの 2 つの農村部の開発計画.
(左下)漢の時代(B.C.206)からの都市の変遷.　(右下)産官学連携した都市開発.
本人撮影



＜トルコ出身者から見た京都

―文化の架け橋としての名誉友好大使活動を通して

―＞

氏　　名：アフメット・ジャン・プルトゥジュ
任命年度：令和７年度任命
出 身 地：トルコ共和国
在 住 地：京都市 在住

1．出身地（トルコ）について

私の出身地であるトルコ共和国は、アジアとヨーロッパの交差点に位置し、古代から現代に至るまで多様な文明が重なり合ってきた国です。オスマン帝国の歴史に代表されるように、異なる宗教・言語・文化が共存してきたことが、現在のトルコ社会の大きな特徴となっています。

食文化においても、ケバブやメゼ（前菜）などに象徴されるように、家庭的で人とのつながりを大切にする文化が根付いています。人々は来客を温かく迎え、食卓を囲みながら対話を重ねることを重視します。このような「日常の中の交流」は、私自身の価値観の基盤にもなっています。

2．出身地の人々から見た「京都」

トルコ出身者の視点から見る京都は、「歴史が現在の生活の中で生き続けている都市」として非常に印象的です。トルコにもイスタンブールなど歴史都市はありますが、京都では伝統文化が観光資源としてだけでなく、市民の日常の中に自然に溶け込んでいる点に強い共感を覚えます。

例えば、神社仏閣、町家、年中行事、季節感を大切にする感性は、トルコの伝統的な生活文化とも通じるものがあります。トルコの人々が京都に魅力を感じる理由は、単なる「古都」だからではなく、「歴史と現代が共存している生きた都市」である点にあると感じています。

3．名誉友好大使として活動する中で考えたこと・感じたこと

京都府名誉友好大使として活動する中で、私は「文化交流は知識の伝達ではなく、体験の共有によって深まるものだ」ということを強く実感しました。

その一例として、トルコ料理を通じた文化紹介活動があります。これまで、京都府内でトルコ料理教室を実施し、オスマン宮廷料理として知られる hünkar beğendi（フュンキャル・ベエンディ） を紹介しました。この料理は、食材だけでなく歴史的背景や食文化と深く結びついており、参加者の方々がトルコの歴史や家庭文化に関心を持つきっかけとなりました。

また、京都府公式の YouTube チャンネルにおいては、京都府知事にもご出演いただき、トルコの朝食文化を代表する料理 menemen（メネメン） を実際に調

理しながら紹介しました。調理という日常的な行為を通してトルコ文化を伝えることで、視聴者にとっても親しみやすく、文化を「自分ごと」として感じてもらえる機会になったと感じています。



京都府公式 YouTube チャンネルにおいて、京都府知事にもご出演いただき、トルコの朝食文化を代表する料理「menemen（メネメン）」を紹介した動画の一場面（京都府公式 YouTube チャンネルより抜粋）
動画 URL：https://youtu.be/snk0cyOCUHM?si=FI4ysyzKqtLIwzyy

食卓、会話といった日常的な営みは、国や文化が異なっても人々を自然につなぐ力を持っています。

研究者として日本に長期滞在している立場から、日本社会を外部と内部の両方の視点で見つめ、その魅力を客観的かつ丁寧に伝えることも、名誉友好大使としての重要な役割だと考えています。今後も、トルコと京都、日本をつなぐ架け橋として、食文化や学術、日常交流を通じた相互理解の促進に貢献していきたいと考えています。

＜名誉友好大使として活動する中で考えたこと、感じたこと＞

氏　　名：KIM YOONKYUNG（キム・ユンギョン）
任 命 年 度：令和７年度任命
出　身　地：大韓民国
在　住　地：京都市在住



2025 年の夏に京都府名誉友好大使に任命されてから、約半年が経過した。この短い期間、京都各地を巡り様々な活動に参加したことは、私にとって極めて有意義な経験となった。本レポートでは、これまでの活動を振り返り、日本の教育現場における交流から得た知見について整理したい。これまでの大使活動を総括する中で、私はこの半年間の活動を通じて、日本の小学校、中学校、そして高校、つまりすべての段階の児童・生徒と交流を持つことができたという点に気付いた。私はかつて日本に居住していた経験があるものの、日本人学生のみで構成された学校に通ったことはなかった。そのため、日本の学生たちとの交流イベントは私にとって非常に新鮮な経験であり、日本の教育環境を内側から肌で感じる貴重な機会となった。

まず、「京都府 WWL サミット」というイベントを通じ、日本の高校生たちと交流する機会を得た。本イベントは、日本とオーストラリアの高校生が Zoom を介して集まり、SDGs に関連する諸テーマについてグループごとに日本語と英語で討論して最後に発表を行う活動である。私はそこで学生たちがより自由に意見を交わせるよう議論を促す「ファシリテーター」という役割を担った。私が担当したグループは英語で討論を行う必要があったため、当初は日本の学生たちが緊張から消極的な姿勢を見せる場面もあった。しかし、次第に打ち解けて緊張がほぐれると、終盤にはオーストラリアの学生の発表に対して自ら質問を投げかけるなどの積極的な姿勢が見られた。今回の活動を通じて、日本の学生は事前の準備を極めて入念に行い、集団の空気を読みながら適切に行動する傾向があると感じた。また、個人的には集団生活を重視する韓国と日本の学生の学習傾向には、類似した点があるのではないかと考えるに至った。

その後、木津川市立木津第二中学校にて、教職員の方々と生徒たちに向けて韓国を紹介する交流活動を行った。私は韓国の文化や食べ物、観光地、遊びなどについて紹介した。活動の最後には、韓国の伝統的な遊びである「東大門を開けろ」や「ドゥングルゲ・ドゥングルゲ（丸く丸く）」を生徒たちと共に楽しんだ。体を動かすゲームということもあり、皆が積極的に参加してくれた。ま

た、生徒たちも自校や日本の文化についてチームごとに発表を準備してくれたが、韓国について追加的に調査したり、韓国語に翻訳した資料を添えたりするなど、韓国人である私への配慮が感じられる場面が多く、嬉しく思った。活動終了後には、担当したクラスの生徒全員が私宛に短い感謝のメッセージを書いてくれた。それらは今でも深く記憶に残っているほど感動を受けた。

最後に訪問した木津川市立高の原小学校では、全校生徒を対象に、韓国の小学生の生活だけでなく伝統文化、特に名節（伝統年中行事）や遊びに焦点を当てて発表を行った。中学校での活動と同様の遊びを準備したが、体育館という広い場所で行ったことも相まって、生徒たちが一層本気で楽しんでいる様子が伝わり、私自身も充実な時間を過ごすことができた。この活動を通じ、韓国と日本の行事と伝統的な遊びには共通点が多いということを改めて実感した。そのため、詳しい説明を省いてもスムーズに理解してもらえる部分が多く、両国の文化的な親和性を再確認する機会となった。質疑応答の時間には、素朴な疑問から踏み込んだ内容まで、予想以上に多くの学生たちが韓国の文化に関心を寄せていることが分かり、同時に、日本の文化が韓国でどの程度知られているのかという点についても興味を抱いていることに気づくことができた。

大学入学後は大学生または社会人と接する機会がほとんどであり、自分よりずっと若い世代の学生と接するのは久しぶりだったため、当初は「距離感を感じさせてしまわないか」という不安もあった。しかし、予想に反して多くの学生たちが自ら積極的に声をかけてくれたし、「韓国が大好きだ」と温かく迎えてくれたおかげで、不安はすぐに解消され、互いに打ち解けて交流することができた。また、活動そのものだけでなく、準備の過程においても多くの学びを得た。ビジネスメールの作成方法やプレゼンテーション資料の制作スキルなど、将来社会に出た際にも役立つ実務的な能力を養うことができ、極めて貴重な経験となった。今後もこれまでの活動を教訓とし、日本の学校で学生たちと互いの文化を共有しながら、意義のある交流を継続していきたい。

＜台湾に根づく日本チェーン店＞



氏　　名：黄登肯（コウ　ダンカン）
任 命 年 度：令和７年度任命
出　身　地：台湾高雄市
在　住　地：京都在住

世界最大のくら寿司、実は南台湾の「高雄」にあります。そう聞くと、思わず二度見してしまう人も多いのではないでしょうか。これは、日系の飲食チェーンは台湾の市場でいかに圧倒的な存在感を放っているかを物語っています。多くの読者が思っている以上に、広義の和食はすでに台湾の日常に深く入り込んでいます。それは、日本と台湾の食文化が近しいという理由だけでなく、日本企業の約 30 年にわたった海外展開の努力ともいえるでしょう。このコラムでは、日本の飲食チェーンからはじめる、台湾で活躍する日系系列店を紹介していきます。

一、飲食チェーン

台湾の寿司チェーン市場では、くら寿司だけでなく、スシロー、はま寿司、寿司のみどりなど、日本でもおなじみのブランドが競争し合います。さらに、牛丼御三家の吉野家、すき家、松屋もすべて台湾に出店しており、中でもすき家の店舗数はなんと 73 店舗に達しています。そのほかにも、サイゼリヤ、ロイヤルホスト、コメダ珈琲店、丸亀製麺、CoCo 壱番屋など、日本でも広く知られている外食チェーンは数多く存在します。

これらの店舗のなかには、日本の味付けをほぼそのまま持ち込んでいる例もありますが、多くは台湾の嗜好に合わせて微調整が施されていることを見受けられます。たとえば、吉野家で定番のキャベツの千切りは台湾の店舗ではあまり見られず、代わりにブロッコリーやにんじんといった温野菜が提供されています。また、すき家では台湾料理で一般的な茹で野菜をセットとして提供しています。ここから日本と台湾の野菜調理に対する考え方や好みの違いを垣間見ることができます。

さらに、台湾限定のメニューを提供する店舗も少なくありません。台湾のサイゼリヤではチキンドリアやイカ焼きが提供されており、CoCo 壱番屋では麻婆エビカレーやカレーラーメンなど、日本では見られないメニューが並びます。食文化の距離が近い日本と台湾であっても、現地の消費者に寄り添うための工夫が随所に見られる点は興味深いところです。

なお、価格に関心を持つ読者もいらっしゃるかもしれませんが、円安の影響を受け、台湾での価格設定は日本よりやや高めとなっています。ただし、全体として見ると、その差は限定的だと言えるでしょう。

二、そのほかのチェーン

ここまでは飲食業界を中心に紹介してきましたが、台湾ではそのほかの分野においても日系企業の存在感が際立っています。まず、日常生活に密接に関わる小売・雑貨業では、ダイソー、無印良品、ニトリといった店舗が幅広く展開されています。アパレル分野ではユニクロや BEAMS が定着しているほか、ロピア、紀伊國屋書店、三越百貨店なども台湾の人々の日常生活に深く浸透しています。ここで注目すべきなのは、これらの企業が単に「日本らしさ」を前面に押し出しているわけではなく、長年の経営や現地企業との提携を通じて、台湾の日常的なブランドとして受け入れられています。

また、一見すると想像しにくい分野にも日系チェーンは進出しています。教育業界では、明光義塾や公文式（KUMON）が代表例です。個別指導や自学自習といった、日本発の教育スタイルは、従来の台湾にはなかった学習形態として新たな需要を開拓しています。インフラ分野では、タイムズレンタカーや、その親会社が展開するパーク 24 などが挙げられるでしょう。

三、終わりに

台湾に進出している日系企業をすべて列挙しようとすれば、とてもこの紙幅には収まりません。そこで、このコラムでは、特に人々の日常生活と直接に関わっている業界に焦点を当てて紹介してきました。限られた事例ではありますが、日本企業、そして日本文化が台湾の人々の生活に与えている影響の大きさは、十分に感じ取れるのではないでしょうか。こうした点は議論の中で見過ごされがちですが、台湾の人々が日本に親しみを抱く理由の一つであるとも考えられます。日常的に日本由来の商品やサービスに触れ、その背後にある価値観を自然と受け取っているからです。これは公式なものではありませんが、ある種の国際交流のかたちと言えるのかもしれません。

＜双都物語：京都の静と西安の動が交差する、もうひとつの千年の都へ＞



氏　　名：張歆婕（チョウ　キンショウ）
任 命 年 度：令和７年度任命
出　身　地：中国陝西省西安市
在　住　地：京都市在住

京都の皆さま、日々、洗練された街並みや磨き抜かれた伝統の中で過ごされている皆さまにとって、古都という言葉は日常の一部かもしれません。しかし、海を越えた大陸に、京都と同様に深い歴史の層を持ちながら、全く異なる躍動感を放つ都市があることをご存知でしょうか。

かつてシルクロードの起点として栄華を極めた陝西省西安。この街は、整然とした都市構造と不変のプライドを持ち合わせ、今、歴史を五感で体験するエンターテインメントの聖地として進化を続けています。

西安を俯瞰したとき、まず目に飛び込んでくるのは、街の中心を南北に貫くメインストリートと、それに交差する通りが描く完璧な碁盤の目です。この構造は、千年以上経った今も西安のアイデンティティとして息づいています。特筆すべきは、街の核を囲む巨大な城壁です。京都が山々に抱かれた盆地であるのに対し、西安は人の手で築かれた壮大な石の壁に守られています。形は違えど、外界から隔てられた空間の中で独自の文化を醸成させてきたという点において、両都市は非常に似通った風格を湛えています。



この歴史深い古都は、現在、新たな活気に満ちあふれています。今の西安を象徴する場所といえば、間違いなく大唐不夜城でしょう。広大な大唐芙蓉園の近隣に位置するこのエリアは、夜になると街全体が黄金色の光に包まれ、眠らない夢の都へと姿を変えます。唐代の建築美を忠実に、かつ大胆に再現した楼閣が立ち並び、最新の LED 演出や音楽と融合する様は圧巻です。歴史を現代のエネルギーへとアップデートし、巨大なエンターテインメントへと昇華させる西安の力強さが、ここには凝縮されています。

この街を歩いていて最も衝撃を受けるのは、まるで唐の時代にタイムスリップしたかのような感覚です。その感覚をもたらすのは歴史的な建築だけでなく、空前の漢服ブームにあります。大唐不夜城を埋め尽くす群衆の多くが、当時の装いを再現したメイクを施し、華やかな古代の装束に身を包んでいます。漢服を着た若者たちが、スマートフォンで動画を撮影しながら歴史的な建築物の間を闊歩する――その光景は、過去と未来が激しく交差するサイバーパンクならぬサイバー大唐とも言うべき不思議な調和を生んでいます。歴史を眺めるものから自分たちが主役となって演じるものへ。この圧倒的な熱量は、今の西安ならではの光景です。



もし皆さまが西安を訪れる機会があれば、西安で生まれ育った私から、おすすめの一日観光モデルコースをご紹介しましょう。まずは日中、街のシンボルである巨大な城壁に登り、レンタサイクルで風を切りながら、城壁の内側に広がるパノラマを楽しんでください。夕暮れ時になったら、いよいよ大唐不夜城エリアへ。まずは現地のスタジオで本格的な漢服に着替え、唐代の貴人になりきって夜の街へ繰り出しましょう。ライトアップされた楼閣を背景に写真を撮り、至る所で開催されている華やかなライブパフォーマンスを堪能した後は、締めくくりに炭水化物の聖地西安の味を。スパイシーな羊肉の串焼きや、独特の食感が楽しいビャンビャン麺を味わえば、五感すべてで西安という街を刻むことができるはずです。

京都が洗練された静の美しさを極めているとすれば、西安はその歴史の重厚さを動のエネルギーへと変換して楽しむ街です。その熱気を確かめに、ぜひ西安へ足を運んでみてください。

出典：微博（Weibo）@西安大唐不夜城（公式）投稿画像

＜出会いと挑戦の一年

京都府名誉友好大使として学んだこと＞



氏　　名：張　瑜淳（チョウ　ユジュン）
任 命 年 度：令和 7 年度任命
出　身　地：中国広東省
在　住　地：京都市在住

令和 7 年度京都府名誉友好大使として参加したさまざまな活動を通じて、多文化共生や国際交流が、決して遠い理念ではなく、日常の中で実感されるものであることを強く認識するようになりました。本レポートでは、府民交流フェスタや研修、交流の場での経験を中心に、そこから得られた学びを振り返ります。

11 月 3 日、京都府立植物園にて開催された「府民交流フェスタ」に参加いたしました。当日は国際センターのテントにおいて、来場者向け企画「クイズで知ろう 多文化共生と国際協力」の運営を担当し、クイズの出題やヒント出し、抽選の補助、景品の手渡しなどを行いました。フェアトレードや国際理解といったテーマは、専門的に語ると難しくなりがちですが、クイズ形式という身近な方法を通じることで、来場者の関心を自然に引き出すことができたと感じております。互いの国について詳しく知らなくても、楽しみながら参加する中で国籍や年齢を超えた交流が生まれていく様子を目の当たりにし、府民参加型イベントが持つ力をあらためて実感いたしました。とくに、国際協力について目を輝かせながら取り組む子どもたちの姿が印象的で、国際交流を「自分ごと」として伝えることの重要性を強く感じました。

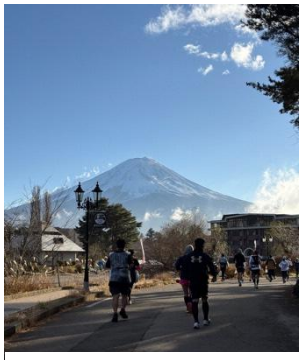
当日はあいにくの天候ではありましたが、午後には少しずつ天気が回復し、植物園の広い芝生とともに穏やかな空気が広がりました。暖かな日差しの中で国際平和をテーマとした歌が流れると、近くにいたボランティアの方々が手話で歌詞を伝えており、その光景が深く心に残りました。言葉や表現の方法は異なっていても、思いを共有しようとする姿勢そのものが、多文化共生の一つのかたちとして感じられました。

また、11 月に参加した京都賞の授賞式では、受賞者の一人であるギリガン氏に直接お会いする機会を得ました。ギリガン氏は、世界的に著名なフェミニストであり、ケア研究を代表する研究者です。これまで著作を通じて学んできた研究者ご本人と、京都で開催された授賞式という場でお会いできたことは、非常に貴重で印象深い経験となりました。京都賞が学術的にも国際的にも高い評

価を受ける賞であることを、実感をもって理解することができました。

さらに、名誉友好大使研修の一環として美山を訪れ、地域文化や人々の暮らしに直接触れる機会を得ました。かやぶきの里の景観や体験型の研修を通じて、京都府内各地域が有する多様な魅力を、体感的に理解することができました。釜炊きごはん体験や、しめ縄づくり体験はいずれも印象深く、地域に根ざした文化の豊かさをあらためて感じるとともに、それらをどのように国内外へ発信していくかを考えるきっかけとなりました。

最後に、個人的な挑戦として、友人とともに富士山マラソンに参加いたしました。人生で一度はマラソンを走ってみたいという思いから挑戦を決めました。当初は完走できるとは全く考えておりませんでしたが、結果的には制限時間 6 時間ぎりぎりで完走することができました。朝から雨が降り、空も曇っていたため、景色はほとんど見えませんでしたが、午後になるにつれて天候は徐々に回復しました。ゴールに近づくにつれ、富士山が次第にはっきりと姿を現し、その光景が強く心に残りました。


図 1（本人撮影）富士山の姿

富士山マラソンは Mt. FUJI International Marathon として開催され、参加者約 8,000 人のうち、外国人ランナーが全体の 7 割を超えておりました[1]。コース上では、Bluetooth で音楽を流しながらベビーカーを押して走る一人のランナーの姿があり、その自由で多様な参加のあり方が強く印象に残りました。競技としてのマラソンであると同時に、それぞれのスタイルが自然に尊重されている空間であり、「多様性」が特別な概念ではなく、日常の風景として体現されているように感じられました。

限界に挑戦する厳しさの中に、国籍や年齢、価値観を超えた共存のあり方を垣間見ることができた点も、富士山マラソンの大きな魅力であったと考えております。走り切った達成感とともに、参加して本当によかったと感じる経験となりました。

人との出会い、地域との出会い、そして自分自身への挑戦を通じて、多様性を受け止め、乗り越えていくことの大切さを学びました。今後も京都府名誉友好大使として、こうした経験を糧に、京都と世界をつなぐ架け橋となれるよう努めていきたいです。

参考資料

[1]YBS ニュース, 2025 年 12 月 14 日,「河口湖畔を快走“富士山マラソン” 外国人参加が過去最多」(https://news.ntv.co.jp/n/ybs/category/sports/ysff6fbdfc459348c29ce6b35da504933c 2026 年 2 月 5 日取得)

＜私のふるさと―広西について＞



氏　　名：リンケツキョウ
任 命 年 度：令和７年度任命
出　身　地：中国広西チワン族自治区
在　住　地：大阪市在住

（1）地理・民族・歴史

私の出身地は、中国南部の沿岸部に位置する広西チワン族自治区です。ベトナムと国境を接し、中国と東南アジアを結ぶ経済・文化交流の重要な地域です。首府は南寧市で、熊本県とは姉妹都市関係にあります。人口は約 5,000 万人で、日本の約 4 割にあたります。

広西の大きな特徴は、多民族が共に暮らしていることです。中国で最も人口の多い少数民族であるチワン族（約 1,800 万人）が居住し、自治区人口の約 31%を占めています。そのほかにも、瑤族、苗族、侗族、么佬族など多くの民族が暮らしています。言語も多様で、広西チワン語、西南官話、広東語、平話、客家語などが使われています。

歴史的には、広西は海上シルクロードの起点の一つでした。古くは百越の地であり、中国とベトナムの文化が交わる地域として発展してきました。秦・漢時代を経て多くの民族が融合し、現在の豊かな文化的背景が形成されました。

（2）自然・気候・風景

広西は山や川が多く、自然に恵まれた地域です。気候は亜熱帯性で、夏は非常に暑く、冬は比較的温暖です。雨が多いため、お米や果物がよく育ちます。特に秋（9 月～11 月）は晴天が多く、最も過ごしやすい季節です。

風景の中でも特に有名なのが、桂林のカルスト地形です。塔のようにそびえる山々と清らかな川が織りなす景観は世界的に知られています。地下には鍾乳洞が広がり、地上と地下の両方に特徴的な地形を見ることができます。

また、龍脊棚田は標高差約 500 メートルの山々に沿って広がり、美しい曲線を描く景観が特徴です。さらに、中国とベトナムにまたがるアジア最大級の滝・徳天瀑布もあり、壮大な自然を体感することができます。

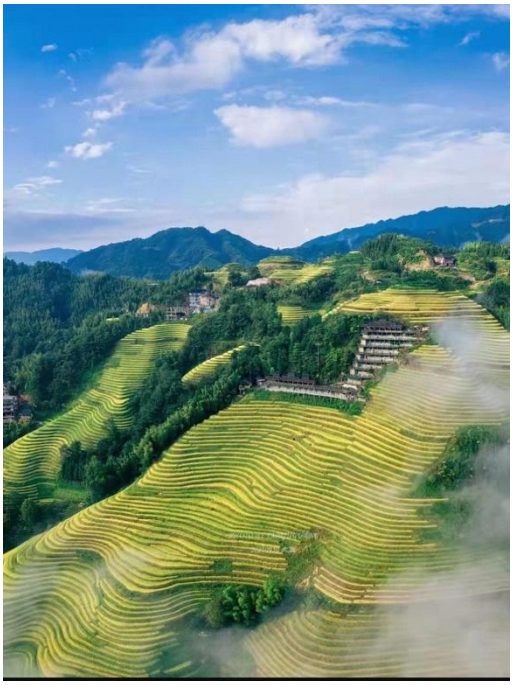




図 1(左):龍脊棚田、中国駐東京観光代表処、https://www.cnto-tokyo.jp/province/%E5%BA%83%E8%A5%BF%E3%83%81%E3%83%AF%E3%83%B3%E6%97%8F%E8%87%AA%E6%B2%BB%E5%8C%BA%EF%BD%9Cguangxi/

図 2(右):カルスト地形、中国駐東京観光代表処、https://www.cnto-tokyo.jp/province/%E5%BA%83%E8%A5%BF%E3%83%81%E3%83%AF%E3%83%B3%E6%97%8F%E8%87%AA%E6%B2%BB%E5%8C%BA%EF%BD%9Cguangxi/

(3) 文化・食・私の思い出

広西では、多民族文化が今も大切に受け継がれています。チワン族の代表的な祭りは「三月三」で、天然植物で色付けした五色のもち米を食べ、歌合戦を行います。また、「繡球(しゅうきゅう)」という刺繍入りの球を投げて愛や友情を伝える風習もあり、若い女性が男性に投げることで愛を示す伝統があります。

食文化も豊かで、桂林米粉やタニシ麺などの麺料理が有名です。ライチ、リュウガン、マンゴーなどの果物も豊富で、日常的に楽しむことができます。

私の子ども時代は、自然とともにありました。リュウガンの木に登って実を食べたり、竹林でかくれんぼをしたり、川で泳いだりしました。田んぼで蓮の実を掘り、その実を食べたこともあります。自然に囲まれた環境の中で育った経験は、今でも私の心の支えになっています。

＜シンガポールと京都の文化多様性＞



氏　　名：Ng Shan Yi（ン・シャンイー）
任 命 年 度：令和７年度任命
出　身　地：シンガポール
在　住　地：京都市在住

名誉友好大使として京都府の小・中学校を訪問し、自国シンガポールを紹介する際、私は必ず「多民族社会」の話をします。シンガポールは多文化・多言語国家として広く知られていますが、それを単なる知識としてではなく、日常生活や学校生活の中で「どのように体験されているのか」という具体的な姿として伝えたいと考えているからです。

例えば、学校の食堂では中華系、マレー系、インド系の文化に根ざしたシンガポール料理を日常的に食べることができ、学生たちは自然と多様な食文化に触れます。また、教育制度においても多様性が前提とされています。共通語・主要な教育言語は英語ですが、学生たちは自分の民族的背景に応じた「母語」（中国語、マレー語、タミル語など）も第二言語として学びます。

さらに、シンガポールの学校では各民族の祝祭を大切にし、ハリラヤやディーパバリ、旧正月などに関連した行事が行われます。こうした行事の中で、、主に学校や地域団体が行う「Racial Harmony Day（民族平和の日）」が毎年７月 21 日に実施されます。この日は、国家として人種・民族間の調和を改めて確認する日であり、学生たちが自分あるいは他文化の伝統衣装を着用し、学校全体が色彩豊かになります。各民族の伝統菓子を味わったり、伝統遊びをクラスで対抗で体験したりするなど、シンガポールを形成する多文化に親しむための活動も行われることが多いです。

この日が制定された背景には、1964 年の人種暴動があります。当時、シンガポールが独立以前マレーシアの一州でしたが、暴動によって 36 人が命を落とし、多くの人々が負傷・拘束されました。1950～60 年代にも他に複数の衝突が起きました。Racial Harmony Day は、こうした歴史を忘れず、多様性は自然に維持されるものではなく、意識的に築き続けて、調和を保つには努力が必要を学ぶ日でもあります。
人種や民族に関わる課題が完全になくなったわけではありません。だからこそ、シンガポールは多様性を強みとして発揮し続けるために、一日限りの表面的なイベントで終わらせるのではなく、差別やステレオタイプについて学んだり、共感や理解を日常の教育の中で育んだりすることも重要なのです。

こうした話を京都の子どもたちに伝えるとき、身近な生活の中での多様性についても考える機会になればと考えています。京都府にも在日コリアンのルーツなど多様な背景を持つ人々も暮らしています。外国人経営のお店やコンビニで働く外国人労働者の方々など、私たちの身近な生活の中にも多様性は確かに存在しています。多文化は国際交流や留学を通して「外」に見に行く経験で見られるとともに、多文化共生は「内」でも見えます。シンガポールの事例またはこうした留学生との交流から、京都府の中で一緒に暮らしている地域社会と多文化交流を考えるきっかけになれるかもしれません。

京都府

京都府国際課
Tel：075-414-4316　FAX：075-414-4314
E-mail：kokusai@pref.kyoto.lg.jp

☆友好大使の活動や友好大使が感じた京都留学の情報を
発信しています。
京都留学情報 http://studykyoto.wordpress.com/about/

京都府名誉友好大使自主活動実行委員会ブログ
http://kpfa1992.blogspot.jp/
京都府名誉友好大使友好大使 facebook
https://facebook.com/KPFA1992